冬雷

短歌雑誌　TOURAI

二〇二五年九月一日発行（毎月一回一日発行）第六十四巻第九号（通巻七六三号）

9月号・2025年

第64回　冬雷大会のご案内

本年の冬雷大会は、次のようになります。

日　時　十月十二日(第二日曜日)
午前十時より四時半までとなります。
懇親会は五時より七時半までです。

会　場　ホテルルートイン東京・東陽町
(地下鉄「東陽町」駅より徒歩５分)

大会用詠草(未発表作品一首)を八月三日必着。
＊出詠費一〇〇〇円を添えて事務局宛。
＊本誌綴じ込みの出詠用紙をご利用下さい。

諸費用　参加費(会場費補充)として　一〇〇〇円
昼食費(ホテル調達御弁当)　三〇〇〇円
懇親会(希望者のみ)　九〇〇〇円
＊当日受付にて御支払下さい。

＊年々参加者の数が減っております。現編集部での体制では今年で最後のホテルでの大会となります。編集部に新しい風を期待します。お若い会員の声をお届けください。

《冬雷短歌会》

9月号　目次

冬雷集……1
作品一……20
九月集……36
残響集……40
作品二……46
作品三……54
七月号冬雷集評……桜井美保子…14
七月集 / 残響集評……鈴木やよい…15
大友柳太朗と美空ひばり④……大山敏夫…16
七月号作品一評……小林芳枝・藤田夏見…34
七月号作品二評……井上菅子・江波戸愛子…42
七月号作品三評……山本三男・橘　美千代…44
七月号十首選（冬雷集・七月集 / 残響集）……54
七月号十首選（作品一・作品二・作品三）……56
歌集 / 歌書御礼……編集室・佐藤靖子…59

表紙絵《さくら》りつこ ／ 題字　田口白汀

冬雷集

大山敏夫　埼玉

老身のわれを束の間わしらかせこの信号のまた走らかす
時代劇観ればほとほとをみならがしぐさのきはの袖しぐれあり
袖ふるも分つ袂もかかはらず短パンTシャツ夏の男は
和服のきみともなふことの無きままに七十すぎて八十まぢか
義妹（いもうと）の仕立てくれしと和服着てにやけてゐたる兄を忘れず
「親切」を「おやぎり」と読みし男ありその後も過去のことも気になる
声変りの前よりひばりは十八番（おはこ）とし高めにのびる「唄入り観音経」
「でんでん太鼓に、笙の笛」低く弾むこゑ四十代の「唄入り観音経」

赤間洋子　東京

グループ展の開催あれば友と行く十日町への一泊旅行
十日町キルト祭りの大会場大作並び海外の作品も
十日町キルト祭りに便乗し我がグループの作品も飾る
我がグループの作品は三箇所にキルトと染めとフェルトを展示
藍染の風船かづら人気あり古民家レストランの梁にて揺れる
幹事役の友の車で案内さる清津渓谷の長きトンネル

トンネルの大き穴より見下ろせば柱状節理の断崖続く
断崖の下を流れる渓流は白く泡立ち風が涼しい

兼目　久　栃木

妻とともにしもつかれを五度作りたりこの冬うましと酒の肴に
中国の男子適齢期多かりき女子少なくて結婚率減りき
あと20年早く生まれれば徴兵制にとられしものを
寒暖の差ははげしく数時間後雨は転じて強風雨となる
ウクライナの女戦士の国を守るとの戦闘に決意を聞きたり
三十人の書道後輩に講演す中国旅行と中国の歌と
じんわりと暑さが増して肌に感ず部屋にゐながらじつとり汗出づ
ガラス窓に映りし夕焼けはまつ赤にして子供心に焼きつきしもの
好まざる戦争に参加し親と離れ子らと離れる戦地に赴き

山﨑　英子　東京

すくすくと空地を埋めて数多の蕗摘みて気長に煮含めたり
年重ね遥かとなりたる古里の野蕗はまこと美味しきものぞ
日数かけ照り良く母の作りしきやら蕗美味なりきなつかし
県道より少し上りて高台に祖母の家ありて共に暮しき
庭近く柿やみかんいちじく枇杷山桃何でも近くにありき
くつわ虫今の季節にうるさき程に啼きゐしを思ふこの頃
著莪の花咲く公園を歩みつついつしか古里の道歩く思ひに

小き御堂に集まりて夏休みの勉強なつかしく思ひ出づ

森藤　ふみ　東京

けふの気温天気予報に確かめて花を見るため公園に来る
生ひ茂る泰山木の枝を避け歩めば花のここかしこ咲く
花を見て合歓の樹と知り仰ぐ幹高さどこまで身を伸ばし見る
合歓の樹の高きに細く枝のびて揺れる先端赤き花ひとつ
大木の花が次々開きゆく泰山木合歓の樹百日紅
熱中症アラート出でたる日の暮れて青く澄む空満月うかぶ
フェンス超えぐんと伸びたるカナメモチ強き日ざしに葉の灼ける
友よりの電話は開口一番に転んでしまつて歩けぬと言ふ
予約米配達の日まで足りないとスーパーに買ふ二キロの袋

櫻井　一江　東京

娘と
そそり立つ硅灰石の上に建つ石山寺の本堂に坐したり
苔のむす「天智天皇の石切場」歴史に浸る石山寺境内
継がれ来し「石山詣」の門前は老舗の風格見せて賑はふ
瀬田川のほとりを娘と歩み行く「瀬田の唐橋」見ゆる処まで
琵琶湖から流れ出でたる瀬田川の対岸にオレンジの集団動く
大津駅前よりシャトルバスに乗り琵琶湖ホテルの十二階室へ
色かたち横幅長く変化させライトアップ続くる「びわこ花噴水」
外来魚回収ボックス置かれある琵琶湖の朝に釣り人集ふ

有泉　泰子　山梨

美術館の緑に囲まるる池の中菖蒲の花咲き母偲びたり
外出のほとんどなくなる夫のゐて買物掃除と助けくれをり
主人弾くエーデルワイスの曲きこゆたどたどしくも心和みぬ
ものすごい雷鳴どしや降りの中帰宅すと都会で下宿の女孫の強し
草木愛で楽しみゐたる隣の地工事始まり吾が部屋日陰に
おとなりさん仲良くしませうよろしくね老の二人の住む佳き町です

冨田　眞紀恵　富山

幼らの明るい声がきこえきて今日は地域の納涼祭である
老たちに元気をくれる幼らの明るい声が施設にひびく
さてあした何をしようかと思ひつつしづみゆく夕陽見送る吾は
あぢさゐが梅雨の晴間を咲きそめて庭に明るさ呼びよせてゐる

青木　初子　神奈川

ボランティアを約す明日は台風の近付き朝より雨風強しと
明日朝は台風近付き自転車は心配だから迎へ呉るると
台風は我が地を逸れて行くらしくボランティア帰りも雨風あらず
自転車に四十分程の距離なれど車での送迎に体力助かる
吾独りの昼食なれば冷凍食電子レンジに時短を頼む
この暑さ何時まで続くかミニトマト茄子ピーマンの実の付き悪し
実の付きの悪く少なきミニトマト蟻と鵯数減らしゆく

この暑さ茄子は謳歌をする如く実を結ばずに葉のみ広げる

中村　晴美　茨城

雷を伴う豪雨に助けられ水やり取り止む暑き六月
群発の地震止まらぬトカラなり大災難の予言盛り上ぐ
炎天下凛と咲くエキナセア葉のみの庭に差し色となり
大木のモミの幹から一斉に蝉が鳴き出す初の涼し日
老眼の更に進み遠近のコンタクトレンズに限界の兆し
雨風の弱き台風油断して吹き返す雨横殴りとなる
姑の畑のキウリ豊作なりネットのレシピつぎつぎと試す
食べきれぬキウリのレシピ最後には輪切り冷凍と一年漬け

橋本　文子　鳥取

胡瓜植ゑ見守る庭によく育ち今年の夏のすべてが元気
幼き日胡瓜にほろ苦さありしこと思ひ出しつつ今年も作る
「おばあちゃん胡瓜上手に育てるね」若者の言葉我にうれしく
製糸工場に塩味さなぎの給食あり若き者皆味はひしこと
夏の日も綿入れ防空頭巾携へて軍需工場に日々通ひしよ

山口　嵩　福島

季節感かもす擬声語いづこへか台風もどきの雨降るこの梅雨
くりかへす猛暑と豪雨に色淡く咲ける鈴蘭つゆを待つらむ
降る雨に風情ありたる梅雨時も猛暑・真夏日・豪雨の今年

鈍色の空に稲妻はしりきてやがてバタバタ騒めくヤツデ
曇りても三十度超す風なき日原子雲たつテレビ画面に
雨風にがたがたと鳴るシャッターに薄ら残る書房の文字あり
過ぎし日に軒先借りし呉服店更地ひさしくドクダミ列なす
街中の更地を烈しく叩く雨更地を出でて歩道へ流れつ

酒　向　陸　江☆　東京

日曜の昼時静かな住宅街に十四台もの消防自動車
火や煙見えねど異臭の立ちこめて家々からは人ひと出でくる
ポンプ車のホース巻き上ぐる姿見て大事にならずホッと安堵す
「ガスつけたままに茶ガラを植木にと外に出たとたんドアが閉じた」と
労いの言葉も届かず騒動を詫びる言葉の一言もなし
スマホ持ち歩いてポイント溜めてゆく保健センターの楽しい企画
今日涼しポイント溜めるチャンスなり友と連れだち九千歩越す

老年　天　野　克　彦　大阪

ただじつと椅子に腰掛けゐることの怠惰の味を知り初めにけり
未来なき齢と知れどひとひらの木の葉の舞ひにこころは遊ぶ
棲みつける蝿いつ匹を朋として危険をしらぬ蝿と戯る
老い告げる肉体からの呼びかけに逆らふこともこの頃あらず
追憶にこころ遊ばすこともなく老いの進みかもの皆忘る
気の遠くなるほど長く生ききしがもう疲れたとおもふこの頃

「もういいかい」誰かが問へば「もういいよ」と答へる我がゐる
ゆつたりと寝椅子に寄りておもふことわが人生のそのプロローグ

高　松　美智子☆　栃木

三歳で髪結うまではと伸ばしいる幼の髪は細く柔らか
そばだてて大人の会話を聞きいたる二歳の口より「まだいける」とひと言
さくらんぼ口に含みてみぎひだり転がしながらあどけなく笑む
エアコンの風量強で冷やしいる部屋より眺める緑のそよぎ
咲きてなお極まりきれず日に灼かれ焦げて立ちいるダリアの無残
百均の老眼鏡をあちこちに置きて忘れてまた買いて来る
手を添えてひと文字ひと文字願い書く「元気で仲よく」八十八歳（グループホーム）
笹の葉に短冊掛ける指ふるえ手を添え見守る願いよ届け

髙　橋　説　子　栃木

大きめの這ひ来る毛虫を潰したり咄嗟にでなくちやんと見据ゑて
効き過ぎの冷房見越して大判のスカーフ持ちて上映を待つ
予告編に赤きマントの翻りスーパーマンは復活するらし
鬼門除けの社に供ふる花丼（はなどんぶり）きのふ紫陽花けふルドベキア
悉く窓開け放ち朝五時の若葉のにほひの空気を招く
表から裏へと空気動き出し普段使はぬ部屋生き返る
こぞ訪ひし伊根の舟屋が映りたり寅さん映画に鄙び鄙びて
孫三人取り合ひて食ぶと聞きたれば春雨一袋また湯に浸す

大塚亮子　東京

納戸の整理しをれば空き箱いつぱいに千代紙細工があふれて出でく
朝顔にオルガン、飛行機、奴さん折りて遊びき姉に教はり
姉の折りたる千代紙細工はわが宝色褪せるなく箱に残りぬ
編み物教室に学びし姉は編み物の仕立屋となる編み機を買ひて
あの頃は既製品などなき時代編み直して着るセーター、カーディガン
町内のおばさんたちの口コミに姉の編み物注文しきり
結婚し子の授かりて編み機より遠ざかり既製品全盛となる
あの編み機今は何処にあるならむ眠れぬ夜に故無く思ふ

古古古米　嶋田正之　埼玉

古古米も古古古米にも縁のなく埼玉県産コシヒカリ食む
新潟の実家の米と持ちくるる二キロの袋を塀越しに受く
減反の畑の跡地に家の建ちひばり何処に越しゆきたるや
毎朝の散歩つづけて三十年同じ道辺の景色激変
荒川の水を引き込む広大な田圃貫く疎水勢ふ
縄を張り揃ひ植ゑたる光景を見ることの無く田植機のゆく
鳴く蛙狙ひ飛びくる白鷺の優美な姿稲田を歩む
しつかりと稲の根付きて水ぬるむ白雲映し心地よき風
例年の習ひとなりたる梅の実の七キロ程をジャムに仕立てる

江波戸愛子☆　埼玉

切りつめし金柑の木にこの年も変わらぬ数多の莟ありたり
金柑の莟ふくらむそのとなり黄鹿の子百合のすんすん伸びる
丈高く伸びたる黄鹿の子百合の花つぎつぎひらきて庭の明るむ
尻もちをついて潰れた背の骨元には戻らぬ医師の言いたり
役員を辞めたる今年の盆踊り麦茶係を頼まれている
瓦屋根いで入る雀を見たと言う話し聴きつつ嬉しくなりぬ
隣室に本を読みいる吾が前にあなたは菓子を置きて出で行く
じゃがいもを今日は多めに貰いたりポテトサラダをたっぷり作る

野村灑子　千葉

「お前の名は本当は『サイコ』といふんだ」水をそそぐの意ありと父は語りき
画数の多い名前に覚えたての漢字に苦労せし事想ひ出す
町会の総会で発言する「町内を占めてゐる幹線道路掃除しませんか?」と
県庁からの主要道路に紙屑の落ちゐず清しく歩む
朝の散歩に紙屑拾ふ吾に「私にはさういふ事できないんだヨネ」と年上の媼は
「紙屑を一回拾へばその道は美しくなる」と吾は思ふに
日赤奉仕員でありたる頃駅前掃除とて何度も行事にかかはりき

田端五百子　岩手

川またぎ数多尾を振る鯉のぼり今日晴天なり五葉峰たかし
黒潮の蛇行するリアス汐風の被災せる林野を吹き抜けてゆく
帰省せる幼の寝床の小さき祠畳むに惜しく諸手差し込む

ドクダミの草引く道端重たげにランドセル背負ふ新一年生とハイタッチ
薔薇のアーチくぐり尋ねる鍼灸院白衣の女性の柔和な笑顔
均らされた学校田に生徒らは後ずさりしつつ苗を植ゑゆく
水の面つまむ如くに生徒らの植ゑゆく早苗青き風生む

橘　美千代　新潟

コロナ禍にスタッフ一同ＰＣＲ検査受けしよこの駐車場に（五十公野運動公園）
来年まで生きられぬかと思ひしも新型コロナ院内感染
かの日ＰＣＲ検査受くるに賑はひし駐車場いま静まりかへる
城の石垣模したる塀に囲まるる陸上競技場なれは走りき（同陸上競技場）
脳天の痺れるほどに蝉の声つよく響かふ木下陰に
公園にをさなき汝らを遊ばせし遊具の今は入れ替へられて
新しく色鮮やかな遊具並ぶ公園にだれもをらぬ真昼ま
公園に遊具ながめて出産に娘の帰りくる日をかぞふ

ブレイクあずさ☆　カナダ

明け方に海へと向かう自転車の肩の高さに大き満月
初夏の夜の大気の冷ややかさ冬の装備にペダル踏みこむ
人おらず車走らぬ交差点信号機のみが律儀に働く
ひといきに走り抜けたる交差点赤信号ににらまれながら
時折に姿を見せるくまねずみ夜の都会にけものみちあり
自転車の真上を飛ぶは梟かそろそろねぐらへ帰るころあい

朝もやにけぶる港の水際に短き虹のひっそりと立つ
大波と小波と交互に寄せくれどアオオオサギは身じろぎもせず
五時九分朝の光に照らされて異次元の街溶けてゆきたり

稲　田　正　康　東京

七月の笹竹と星かざられて今年の半ば早く過ぎたり
七月の壁を飾れる朝顔とほほづきの実のやや大きすぎ
リハビリに五年といへり数ふれば壁に金時五つたびとなる
都議選挙党派の多く出づれども何変はらむといふほどになく
アメリカ車は日本の道にそぐはない知らぬふりしてゐるや彼のひと
誤送信よそほひこれを契機になどいひ来るありて削除いそがし
ゆるゆると杖ひきて行く道ながらすがれたる花はらひなぞする
塀ぎはに野の草たかく高く立ち伸びたる先につぼみを持てり

山　本　三　男☆　群馬

シャツ脱げば汗の臭いの沁み付いて猛暑の日々はまだまだ続く
暑くても軍手をはめて作業する庭仕事するに経験重ね
猛暑日に昼の散歩は無理なれど朝の散歩は続けていたり
昨日の猛暑の残る朝の道生暖かき風の吹きおり
近隣で評判悪しき老人の死の記されたる回覧来たり
町内の祭りの寄付を集めるに寄付は出さぬと言う家もあり
切り詰めて手の届く高さの柿なれど今年も多くの実を結びたり

よく知らず植えにし柿は受粉樹で甘柿もなれば渋柿もなる
柿の実を喰うため植えし柿の木に柿の実のなる風情楽しむ

中村　哲也　宮城

東京へ行くかそれとも帰るのか夜のはやぶさ座席は埋まる
金曜の夜の十時に大宮の駅構内の人の多さよ
夜十時ポニーテールに制服は塾の帰りか残業に似る
乗り換へる武蔵野線は埼玉を抜ければさしも立つ人あらず
三十度越えて風無き新松戸さすが関東暑さが違ふ
座りゐる地下鉄動かず放送は故障を告げて全線止まる（七月九日）
発車せぬ地下鉄結局一時間動かず読書思はず進む

姉川　素枝子　福岡

生きらるる心臓ふしぎと言ひてゐし医このごろいはなくなりぬ
息子の手借りて歩める老の身の心臓なだめなだめ湯あみす
この年のいろいろの花みたりしが名の分からざる一本ありぬ
忘れゐし手提に塵紙など出でて硬貨一枚のこりてをらず
黒ぐろと施設の空を越えゆきし渡り鳥のかげなくなりぬ
渡り鳥の餌場とききし麦畑はや工場の軒つらなりぬ
高層住宅みあげつつ行くわれのまち無表情の人のごとしも
あした夕べ水やるときに鳴きてゐし蛙はどこへ行きたるならむ
角の立つことばを忘れ棹（さを）なくしお迎へ要らぬと意地はりてみる

井上　菅子　山形

薔薇はひとへに紅く咲くのみ美しくも哀しくも見ゆ人の心は
造影剤漏れたる腕の紫の北極圏はなかなか消えず
脳神経外科外来の前で待つわれは隣の科を待つ患者
辞書を引きつつ再びを読む馬場あき子『鶴かへらず』の一首解くため
朝のテレビにミロの絵見つつ内面を描くといふことここでも学ぶ
蔓薔薇を這はせて明るき洋館に住みたき少女の頃にもつ夢
置かれた場所で生くる他なし南アメリカ恋ひつつ団扇サボテンは咲く
七号線への近道のみに通らるる村は涼しきあやめの盛り
敵も味方ももう誰もゐぬただ一人残されて遠く淡き確執

井上　槇子　新潟

垂れ梅の香る畑中に談笑す媼ら溶け込み一幅の景
老木の桜見るため永らふと講に訪ひ来る媼は呟く
紫陽花の白の八重咲く庭にゐて友の葬送晴れ間に見送る
事あれば絶えずぶつかる胸の内迷ひ惑ひて昼にノンアル
夫婦仲まあまあにありて子を育て教育基本外れるか梃摺る
威勢よく夫と諍ひ部屋出れど僅かの地震にはや戻りたり
「白髪染めやめた」と友はベレー帽被りてファッション素敵に決め来る
報道のプーチンの顔見る度に眉を顰める事しか出来ず
咲き初むかハイビスカスの黄の蕾とどむ数日三十度超ゆ

七月号冬雷集評

桜井美保子

わが母が百三歳まで生きたゆゑ百二十歳までと愚息は言ひぬ　赤間洋子

百二十歳までと生きて言われても戸惑うかもしれないが、ご子息が作者の長寿を願って元気づけてくれることは何より嬉しいことに違いない。その言葉を一首に収めて温かい作品となった。

岸壁に張り付く貝を餌にして魚釣る知恵の少しを聞きぬ　櫻井一江

一連の歌から釣りの場所は運河沿いであるらしい。たまたま行き合った釣り人との会話。短い時間ではあるけれど、思いがけない釣りの知恵を聞くことができた。その日の充実感が伝わってくる。

筋肉の落ちて体幹定まらずフラフラ術後九日目退院　青木初子

大きな手術を受けて無事に退院の運びとなる。しかし体はまだ元の状態ではなく、歩くとふらついてしまう。実感の出た作品である。ご快復をお祈りします。

屈みつつ芝生の草を手際よく抜きいし義母の姿偲ばる　吉田綾子☆

屈んで草を抜くのは、なかなか大変なこと。それをさっと動いて手際よく抜いていたお姑様を思い出している。今でも心の中にある尊くて慕わしい姿なのだ。

千三百年経たるこの「墓誌」目のあたり昂ぶるこころ抑へがたしも　天野克彦

「古事記」を編纂した太安万侶の墓誌に博物館で接した折の、心が震える瞬間を表現。一連の作品から作者が大和にある安万侶の墓を何度も訪ねていたことを知る。結句に熱い思いが籠った。

花時を少し違えて咲き継げるうす紅むらさき白藤黄ばな　高松美智子☆

足利フラワーパークでの作。筆者も一度訪れたことがあるが大藤の姿は見事。それだけでなく色々な種類の藤を植えていることがこの歌からも分かる。「花時を少し違えて」は観に来てくれる客への運営側の配慮でもあるのだろう。

道のべに立つ沈丁花ひとむらのおほかた過ぎつかをり残して　稲田正康

道を歩きながら出会ったひとむらの沈丁花。大方、花の盛りは過ぎてしまったが香りだけはその存在を示すように残っていた。時季を過ぎた花を惜しむ。心が動いた一瞬を透かさず一首とした。「かをり残して」に余韻がある。

広き背に桜の花びら積もらせてホーン高らかゴミ収集車　ブレイクあずさ☆

作者の暮らすカナダの街にも桜の木がある。花びらで飾り立て楽器のような音を出して登場したゴミ収集車。日常生活になくてはならない働きをする。その収集車を臨場感たっぷりにユーモアと親しみを込めて捉えた。

花見ればどこか何かのほぐれゆく感じのしきり躰の軽く　大山敏夫

お住まいの近くの桜だろうか。身体感覚を通した表現に読者は自然に引き込まれる。花を見ている自分自身を詠んでいる。癒されてゆくような快いひととき。

今月号よりこの欄の批評を担当させていただくことになりました。一所懸命に書きますのでよろしくお願いします。

七月集／残響集評

鈴木やよい

参道のさくらはわれの標本木高らかに今日開花宣言す　梶尾栄子

参道の桜を自分の標本木としているようだ。待ちかねていた蕾が開いて、さあ開花だ。喜びと期待が「高らかに」の言葉によく表れている。

四十個の花柄摘みてコンポストに踏みしめている緋色の牡丹　藤田夏見☆

四十個もの牡丹を咲かせるとはすばらしい。立派に咲いた牡丹も時と共に萎れてしまう。踏みしめている花柄の緋色が印象的だ。

そろそろに我が住む家に帰らむや宇都宮も青森も空の色うつくし　東　ミチ

息子さんの家で何日か過ごし、そろそろ家に帰ろうと思う作者。宇都宮も青森も空の色がうつくしいという表現に、来てよかったという満足感がみえる。心がほのぼのとする。

アレルギーのある孫に送る菓子えらぶ原材料をしつかりと見て　松居光子

食物アレルギーのあるお孫さんのためにお菓子を選んでいる。原因物質が含まれていないかじっくり確認している様子が目に浮かぶ。

ありがたし自然に生えたる山椒はコンクリートの隙間に伸びる　加藤富子☆

鳥が実を食べて運ばれてきたのか、山椒が自然に生えてきた。それを見て「ありがたし」と喜ぶ姿が楽しい。同時に、植物の力強さにも驚いているようだ。

畝を立てじやが芋二キロを植ゑつける今年も出来たとわれを褒めつつ　水澤タカ子

畝立てするだけでも重労働なのに、じゃが芋二キロを植え付けたという。こうやって体を動かし続けることが体力維持に繋がっているのだろう。

信管の仕組まれているごとき玉ねぎがふた玉残るコンテナの隅に　藤田英輔☆

「信管」を身近に見たことはない。単に言葉として、爆弾などを起爆させる装置ぐらいの認識しかなかった。玉ねぎに信管が仕組まれているという発想はどこからくるのだろうか。静かな情景ではあるが何となく胸がざわつく。

育てたる野菜を子等に届けたしこれもあれもと箱に詰めつつ　松﨑みき子

自分で育てた野菜を子供たちに送ろうと、あれもこれもと箱に詰めている。母親の気持ちがよく表れている。おいしい野菜が届く子供たちも幸せだ。

ピーラーでシュルシュル削る大根に香り漂う切り干し作り　越澤太朗☆

シュルシュルという音に大根の新鮮さを感じる。削るたびに漂ってくる香りは、水分をたっぷり含んだ大根ならではの香りだろう。

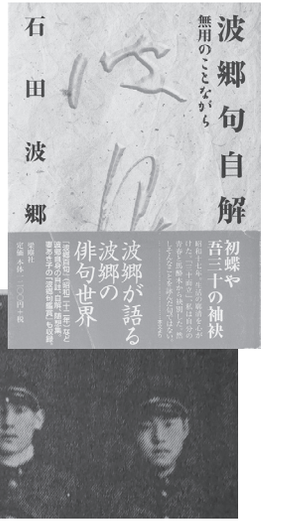
ドイリーやテーブルセンター断捨離す編み目に込めた幸も時間も　金子八重子☆

最近、若い人たちの間で編物がブームになっていると聞く。無心に編むという行為が心を癒すようだ。たとえこの作者がかつての作品を断捨離しても、幸せな時間の記憶は残ると思う。

大友柳太朗と美空ひばり④

―その短歌と情（こころ）―

大山敏夫



中学時代の柳太朗（左）と波郷（右）
『波郷句自解　無用のことながら』285頁より

ひるがほのほとりによべの渚あり

波郷のこの作品を新人時代の代表句とする人も多い。松山市在住時代に若くして水原秋桜子主宰の雑誌「馬酔木」の巻頭を飾った中の一句である。波郷による自句自解の数はたくさんあるが、推定昭和六年の作として、その著書『波郷句自解　無用のことながら』（梁塵社二〇〇三年刊＊表紙写真右）には、「雑詠句評会自解」として次のように載っている。

〈何かやけに頭がもやもやして海へとび出した。よく晴れた夏の朝だつた。海の色と、島の色と、空の色と、だから水平線の雲の峰は実にあざやかだつた。影法師なんかこもつてゐない奴だつた。こいつをみたらもうすつかり朗らかになつて渚の逍遙をほしいまゝにした。凪のうしほはきよらかに、走せては消え、走せては消えする諸波はこれをふちどつて白い。照りつゞく砂浜のスロープ、そしてあさぎにかゞやく浜草帯の端にはあくまでも静かに明るい浜昼顔が咲きつゞいてゐる。このすべてかゞやかしいコントラスト（の美）の中に、ひるがほのほとりに白くかは（ママ）いた淡い藻屑の一線がつゞいてゐるのはよべの渚ではないか。こいつが句にせずと居られるかと力んでの作だつたのですが。〉

朝の海辺で発見した昨夜の波打ち際（なぎさ）の痕跡なのである。「雑詠句評会」というのは「ホトトギス」誌上に連載されたもので、高浜虚子を中心にして、当時の名だたる人らが、注目の句を様々な視点から論評し徹底的に鑑賞したもので、十九年間ほど続いた。そこに波郷作品も上がり、波郷自身がその句の「自解」をあらわしたものかと思う。

坪内稔典氏はブログ（2021-08-17）に波郷の五句を載せ、〈…掲出したものはまだ四国の松山にいたころの10代の作。彼は俳句を作り始めたらすぐに当時の俳句の表現の前線に立った感じだ。各句の情景が鮮明だし、リズムも快い。露の汽車の句は油絵みたい。物語の一場面みたいだ。〉と言う。

虹立つやとりどり熟れしトマト園
ひるがほのほとりによべの渚あり
露の駅中学生のたまりくる

露の汽車線路工夫を野にのこす
はたはたや体操のクラス遠くあり

昭和六年から七年にかけての作品かと思う。「露の駅」の句は、中学生だった波郷が通学に利用した伊予鉄・郡中線の駅だろう。「中学生のたまりくる」には、少し前の自分たちの姿を思い出しているのか。はたはた（バッタ）の時折飛ぶ向こう側に見ているのも、中学の校庭の様かもしれない。これらを読めば当時の大友柳太朗も、堪らない郷愁を覚えただろう。最初のトマトの句からも歌集『渚』の、

腹へればトマトを喰ひて詩をかきし二十歳の頃のなつかしき哉

を何となく想起させる。波郷の句の中の「渚」は、大友にも同様に愛してやまぬ伊予松山の美しい海辺のことなのだ。

昭和四年、十七歳だった時に次のように海辺を歌った。

夜の海や月の光に遠き島のねむるが如き灯のもれ来る

また、次のような詩も残している。

森の夕
浮世はなれた読経の
声も夕の香にとけぬ。
あはれこの世はかりの世ぞ
喜怒哀楽は何んぢややら
やがて日も入るさみしらに。

十七歳でのこれはかなりの老成に見える。「この世はかりの世ぞ」はどこから学び取ったものか。中学校時代に部屋を借りていた真宗大谷派の専念寺で聞いていた読経の影響なのか。専念寺は敗戦後に規模が縮小されたが、かつては広い土地をもつ寺で、坊守に可愛いがられてその離れに母親と一緒に住んでいた。境内には「亀石」と呼ばれる二畳ほどの平たい石があり、若き日の大友はその上で剣道の修行、型と捌きの練習を重ねたという。

波郷が初の句集の中で「自分に俳句を勧めてくれたのは今映画俳優をしている大友柳太郎である」と書いていたことを知っていたので、その逆に、自身の初めての歌集刊行には波郷の初期作品の中から題名を考えたとしても自然である。

大友柳太朗が応召による戦地での塹壕掘りを歌った作品や、敗戦によって生き残り帰還艦の中から祖国をのぞむ作品を遺したことは本稿①に於いて述べたが、あの二首がどういうところに掲載されたものかは分からず、たぶん大友の後援会の会報のようなものに載ったのだろうと推測した。歌集『渚』の頃の大友後援会には、歌集を制作してくれるような行動力は備えていた。

しかし、どうも何かしっくりしないものは感じる。歌集の上梓について記す大友の「病床日記」には「二百首ばかり、自分の好きなものばかりをえらんで」後援会有志に託したと

あるが、実際に掲載されたものは、実数一二八首だったのである。かなり数の違いがある。この厳選は誰の判断でなされたものなのか。そういう選歌をできるような智見のある人が後援会の中にいたのだろうか。更に気になるのは、出来上がった『渚』という本には、一つならずエラーがある点である。一番大きなミス、これは市販される書籍だとしたら即刻回収作り直し級の事故かもしれない。

本文1折の16ページの中に版面（はんづら）の位置が一センチほど上にずれている箇所が4ページあり（表裏の位置は合っている）、見開きとなる場合、左右のノンブルと版面に段差が生じている点である。昔の活版印刷は重版を見込めぬ物だと、印刷機に直に原版を据え付けて表裏を合わせて刷るので、その時に版面位置が狂ったのだろう。二つ目のミスは、本文「序」の頁に一頁起こして「序」としたのに、その裏面から配置の序文見開きにも頭に「序」と記した点であろうか。細かい事だがやはり気になる。著者自身は、この出来本を手にして、正直どのような印象を抱いたのだろう。

短歌のことではないが、戦時中の戦地慰問雑誌の中に大友柳太朗の俳句が載っていたというブログ記事を見た。〈つぶやき舘〉（二〇二〇年二月三日）の「深田久弥が軍隊生活で開いていた句会」と題するもの。

深田少尉は、慰問誌に載っていた大友柳太朗さんの俳句を笑いながら見せてくれました。慰問雑誌は、国民の寄付金（恤兵金）によって制作され、大衆娯楽を誌面動員し戦地に文化、エンターテイメントを提供する、戦争に資するエンタメ誌である。恤兵（じゅっぺい・じっぺい）は、軍隊や軍人に対する献金や寄付、またそれらを送ること。戦地に直接届けられるものとしては慰問袋が有名。

壮漢の放尿し終る枯野哉

そうかん、元気盛んな男のこと。

剣豪役者の大友柳太郎と下にありました。

「これは見事な換骨奪胎だね」

とふふふと、笑い続けるのでした。前歯が一本欠けたままでした。蕪村の「大とこの糞ひりおわす枯野哉」は有名ですから、松山中学卒で石田波郷とも友人という大友さんは、先行の句を巧みにもじったわけです。

深田久彌少尉の懐かしい思い出です。

講談社が委託を受けて作っていたのが『陣中倶楽部』だったようだが、陸軍恤兵部が刊行元。そこから依頼されて大友柳太朗も応えて投稿したのだろう。短歌ではなく俳句で、しかもよく読むと蕪村の〈大とこの糞ひりおわす枯野哉〉の焼き直しという無個性のものだった。これはどう考えたらよいのだろうか。こうした恤兵慰問雑誌類をよく調査すれば、こういう作品が大友柳太朗には他にも存在するのかもしれない。わたしには、明日の命も知れない戦地で、様々な検閲を受けつつ、まともに新しい現地の実際の様子をひねって作品化するなど到底その気になり得なかったのだろうと思われる。大友の作歌意欲（俳句よりも強く）は、戦場での悲惨な日々のうちに潰えていったような気がしてならない。

昭和二十一年五月に戦地より帰還した大友柳太朗は、広島県能美島の実家に戻っていた母を迎えに行き、大阪に住んでいた妻と三人で大阪府豊中市に居を構える。年譜には三十四歳とあり、九月頃より地方実演巡業を始める、と記す。

この時期はGHQの「チャンバラ禁止令」が出ていたので、時代劇映画の復活には手枷足枷があった。禁止令には十三の項目があり、次のようなところが問題となりそうだった。

○その主旨に仇討復讐のあるもの。
○国家主義的、好戦的、もしくは排他的なもの。
○歴史的事実を曲解せしもの。
○「封建主義」を連想させるもの、あるいは希望、名誉の生活を侮辱せるもの。
○過去、現在、未来の軍事主義を謳歌せしもの。
○いかなる形式にせよ、直接間接を問わず自殺を連想せるものを取扱ったもの。
○婦人の服従、あるいは、貶下（へんげ）を扱ったもの。
○死、残酷、あるいは悪の栄えるものを描きしもの。

従来の時代劇は作り難い中にあって、翌二十二年になると映画「天下の御見番を意見する男」（木村恵吾監督　大映）で主役を演ずる。ちょっとややこしいが所謂一心太助であり、番町皿屋敷の話をもとに、家宝の皿を割ってしまった腰元を救うために、主人の大久保彦左衛門に意見する筋書きだ。ゲンコツによる殴り合いはあるが、チャンバラにならない痛快時代劇というところ。

この年は作品も少なく、且つ助演が多く、生活のためには稼がねばならず、自ら劇団「新星座」を主宰しての巡業だった。住いも京都市内に移る、と「年譜」に記す。

巡業は別府「世界館」、松山「立花座」、大阪「難波座」、「八千代劇場」、神戸「花月劇場」の名が見え、他に宇和島、広島等の場所や共演者が記されている。中でも別府の「世界館」での公演に注目したい。出し物「殺陣田村（たてたむら）」であった。

この「殺陣田村」は新国劇の親である澤田正二郎が立案。謡曲『田村』の調べを背景にして、紋付袴姿の俳優が殺人の芸術性を求め、様々な形の斬り合いを披露する物である。一九二一年に初演し、その後一九二九年、一九三六年と上演されてきたという。最初はずばり「殺人」とするつもりだったが、直接すぎるので「殺陣」と表記したが意味は同じといわれる。二人で斬り合うことを「立ち回り」、大勢での闘いが「殺陣」となる。「チャンバラ禁止令」に触れないギリギリのところで「芸術」として実演したのかと思う。〈続〉

作品一

桜　井　美保子　神奈川

親しみてきたる街路樹まてばしひ古くなりきて撤去されたり
歩道ぎはに立つゆゑ排気ガス浴びて根つこ充分張ることできず
過酷なる環境にある街路樹と思ふことなく過ぎたる日々よ
老木となれば尊ばるるものを街路樹は老朽化と判断されて
バスを待つところに街路樹もうなくて緑の木陰恋しく思ふ
パンプスの幾つもあれど楽らくと歩けるスニーカーは一番の友
つま先の細きパンプスすんなりと履きしは随分むかしの私
サンダルとスニーカーを履き分けて遠く近くのスーパーに行く
二人とも元気でゐてくれてありがたう短きメール子から届きぬ

正　田　フミヱ☆　栃木

曲がりたる胡瓜の収穫に思い付く水分不足のサインかもしれぬ
この三朝トマトの畝に中玉の食い残り二個だれのしわざか
朝早く畑に来ればカラス四羽トマトの畝に近付いており
われを見たるカラスは飛んで去りたれどトマトの畝に食い残し三個
この夏はカメムシ発生の注意ありトマトに五匹果実吸うなり

カメムシに吸われたトマトまずくなり中玉なれど捨てるほかなし
カメムシを捕らえんとしてペットボトルに少し水入れトマトのそばに
カメムシを悪臭出さず捕らえてもトマトの果実の被害の多し

飯　塚　澄　子　東京

親しむは「間違い探し」リハビリでも帰り間近の楽しみなりき
五月末枝先切りし泰山木酷暑の如き陽光に映ゆ
六月末オレンジの花庭中に花の名忘れ嫁に尋ねる
スマホにて調べて告げる「姫檜扇」花の色合ひ強きオレンジ
妹と高尾へ行きしと息子言ふ三、四度聞く日曜の嫁
この週は膝頭痛き日々なりき詩吟指導の任は果たせど
就寝時足の角度によるものか痛みの出でぬ工夫なす夜々

斉　藤　トミ子☆　栃木

青空と白雲映す早苗田に波紋広げて蛇泳ぎ来る
大き木を定家葛は覆いたり何の木なのか分からぬ程に
立ち枯れの大樹覆いて咲き盛る山藤多き里山の景
親知らず抜きし昔を偲びおり瞬時に奥歯抜かれたるのち
抜かれたる歯の根の浅く痛み無し梅干しの種かつて砕きし
言い訳はいろいろ有るが我が悪し歯科通わずに三年過ぎたり
祝われて面映くいる八十一歳妹達は手本にすると
陸上の大会を見に来てと孫言えば支部の例会欠席とする

浜田　はるみ☆　埼玉

しながわ水族館では目移りし絵の描き方が少しも浮かばぬ
絵にしたき水槽探して時間経ちイルカショーも表現難かし
歩き疲れ最後に決めた水槽は磯ぎんちゃくと派手なクマノミ
クマノミを描くと決めた時には集合までに一時間しか無し
七十五食欲体重減りてきて筋肉つける他なしと決める
自分では運動継続むずかしく渋々ジムに通い始める
週二回運動と疲れで四日消え絵を描く時間益々減りぬ
社会詠を書けない程に人命が軽視されたる戦い続く

岩渕　綾子　岩手

永澤氏らわれを気遣ふその様に天性ありて感謝は尽きぬ
さみどりがあつと言ふ間に深緑農道かくれ鬱陶しくなる
備蓄米いまこそ腕のみせどころ調理次第で何も変らぬ
為(し)来りを無闇に主張のチクリには負けてはならじ若き政治家
古古米に列をなしてるその様に世相が見ゆる現の姿
介護うけ杖を落せば職員さん廊下を隔て機敏に出で来
今は亡き友の呉れたる洋服を身に纏ひつつデイケアに行く

田中　祐子☆　埼玉

藤村のうたがいきなり口をつく夫と旅したる小諸の映りて
婆ちやまの跡地へ家が建ちたりて若きの挨拶に去来今のわれ

「床屋」なるなりわいに白き割烹着の小粋な婆ちやまあらためて想う
柔らかき曲の満ちたる美容室に福島弁のオーナーの温み
北へ向く飾り出窓に胡蝶蘭の莟を抱える鉢の置かるる
枯れかかる胡蝶蘭を預かりて蘇生させ呉るオーナーの技
この窓が花に程良き環境を作ると言いて控え目のオーナー
荒蒔きの百日草の育ちたり大花小花庭に楽しむ

倉浪　ゆみ　埼玉

川越の歌会にわれは初参加得る事あまた貴重な一時
先生の年齢を知りああ我と同世代なり親近感わく
誌上からの記憶せし名が湧きくれば初対面とは思えぬ心地
てん刻に書に刀剣に中国語書庫のやうなり従兄弟の部屋は
観光に来たるお客は台湾の人なり会話つづくはうれし
一日の寒暖の差のはげしくて服を脱ぎ着すああ煩はし
えごの花卯の花そして山法師我の好める白き花たち
梅雨ざむと言ふ状態はどこへやら雨は少なく暑さいやます

林　美智子☆　東京

鳥たちと取り合いをした枇杷の実も終わりて葉を摘み枇杷の葉茶飲む
遊歩道を若者が来ると近づけばお年寄りなり背をシャンとして
畑に撒く用水の水を汲み上げるとたんにギクリと腰を痛める
腰骨立てスッキリと立つ心掛けも腰痛に勝てず屈まりて歩く

右腰痛左に移り三週間そろそろ痛み忘れるも日あり
七月五日夫が初めて担任した十一人が我が家に集う
五十年前の小学一年時五班に分かれ日替わりで来宅
五十年経つても我が家の庭で食べたハヤシライスの味忘れずと
暑い中を楽しかったと帰り行く人たち見送るひとときの幸

松　中　賀　代☆　高知

菜園の茄子ピーマン胡瓜等夏の陽に焼け元気を無くす
花、野菜育てる我も暑さぼけ菜園の見まわり疎かになる
毎夕に安否気遣う娘の電話食事の話体調のこと
月見草月のあかりに花ひらき家の巡りは明るくなりぬ
雨除けにプランターに植え軒下に種類は「アイコ」ミニトマトなり
ミニトマト初に色づく五つの実孫の来る日に摘もうと思う
活発で若々しくて前向きな百歳の友と七夕に会う

鈴　木　やよい　東京

施設からの帰りの道にねぢ花が控へめに咲くすくつと立ちて
棚の奥に蚊取線香残りたるをもつたいないと草取りに置く
ひたすらに鎌の刃先を見つめゐる視界にゆるゆる煙のただよふ
腰痛に危機感募り考へるいよいよやるべき筋トレメニューを
炎天に身は融けたるか道路には日傘の影のみ色濃く進む
葉焼けして力なく咲く擬宝珠に水やり続ける梅雨の時季なれど

葉を茂らせウマノスズクサ伸びをれど今年は幼虫一匹も見えず
見守りの活動続ける夫には声かけくるる幼き友あり

本　郷　歌　子☆　栃木

優勝の余韻醒めやらずXにバスケットの記事探して読みおり
初夏の夜風吹きくる水張田に信号の赤きらきら揺らめく
ドクダミの生い茂る中をホタルブクロ薄紫の頭もたげる
荒草は好き勝手放題に繁りゆく夏痩せするのは茄子トマト胡瓜
荒草の中へと蔓を伸ばしゆく西瓜よ隠れろ烏をだませ
大和撫子は勝たねばならぬ戦争に敵は荒草カメムシに蚊
荒草の生い茂る中ランナーを伸ばして苺は領土を広げる
夏の朝一時間荒草取りたれば昼寝は大っぴら七十三歳

村　上　美　江　岩手

寄り添ひて小さき黄の菊八重の菊からつゆの下地に低く咲く
百歳の友の義母の遺影には暈しの紫陽花の明るく優し
認知症で施設に入りし叔母は知らず息子長男の葬儀の済むを
この暑さ災害級と放映あり植ゑし大葉は萎れて立てず
ミニトマト次々艶が出で来たり暑さに強く羨ましきかな
冷房の涼しさ覚えコタローは自らケージに嫌がらず入る
早いもの明日は七夕願ひ事短冊一枚では到底足りず
吊るしたる喪服はタンスに仕舞へずに葬儀の知らせ次々届く

伊澤　直子☆　東京

建物は日本モダニズム建築の傑作という国際文化会館
建物と庭散策もしてみたく娘の誕生日ランチに出掛く
池の辺に迫り出している窓近きテーブルでのランチ清清しき
鳥居坂胸つき八丁の急坂で息切れしそうにようやく登る
手頃なるかき氷ありて立ち寄りぬ古い板張りの飾らない店
夏の陽に沈丁花の葉は焼かれあわれ水やりだけでは足りぬ
猛暑にて低木草花のつんつんと伸び放題に剪ることができず

乾　義江☆　茨城

編み物の得意な我を孫の知り程好い頃に発注してくる
青き空洗濯物を干す頭上に尾羽ハタハタ雲雀歌へり
間近くの郵便局に売られいる両国国技館のレトルトカレー
赤紫蘇をふんだんに頼みおきし故梅も生姜も良き出来栄えに
アメリカのフェンタニルを飲む人人人薬物汚染に釘付けになる
流れくる市の放送の大抵が行方不明者を知らせる内容
悲しみの未だ癒えない糸満市病に身罷りし父八十年前
薬も無く夫にリンゲルばかり打っていたと母の嘆き未だ聞こえる

永光　徳子☆　東京

バス停に七夕飾り吊されて「ねこかえってきて」と幼の絵と文字
乗客は皆一様に目を細め短冊見上げて車内和みぬ

昭和には七夕祭り賑わいてアーケード街は露店犇く
今の世はクリスマスやらハロウィンに人気移りて七夕消えたり
古きより大事にしたる電話帳今日又一人に斜線を引きぬ
真夏日を百日も咲く百日草豪雨に倒され尚咲きつづく
強烈な夏の陽射しに耐えきれず葉を丸めいる石蕗哀れ
十日前ボランティアさんが除草した庭は早くも草芽立ちいる

松本　英夫　東京

南極が上

キャスターの春とはじける顔ところ最高十五度の大寒の日
笑ひあふ老女の活気堀をこえ伝はり来る二月のぬくき日
桜さく高架に沿へる道くればカタンカタンと八両の過ぐ
みどりなす芝生ひろがる夢の島蝿の群れしを行く人知るや
くれなゐのもみぢの下照るベンチにて老女のひとりスマホを耳に
ＮＴＴドコモの未納と楽天のスマートフォンに警告来たれり
南には南極が上の地図のあり北の常識赤道こえず

稲津　孝子　福岡

花ひらく泰山木の木植木屋に伐るなと言へり道ゆく人が
刀掛けに孫のプラスチックの刀ならびて掛かる我家の道場
居合せし父の刀が新聞紙に包まれ棚の下にあり錆びて
西瓜たべ食べた西瓜の皮むきて塩漬けにせり母のせしごと
暗くなる庭に月見草ひらき無性に寂しくなりてきてをり

テレヴィにて十朱幸代といふ八十二歳話すを見れば確かに彼女
万博に来る元首に必ず會ひ給ふ天皇陛下けふはコソボの大統領に
救急車に運ばれ意識なき我のラインに息子が幾度も呼びゐき

戸部田　とくえ　福岡

雨のあと色つや戻る茄子の苗またれてならぬ花の優美さ
さつま芋さしきの根付き祈りつつ水やりのたび土寄せしてをり
引き当てるみくじ大吉ごほうびと財布にしまふ畏(かしこ)まりつつ
おもしろく介護漫談ききをへて肝に銘じる誠のあかるさ
額あぢさゐ静かさ漂ふ側に立ち例へばこゑを暫し想像
草取りのあとの庭に雀のこゑその清らかさしみじみ身にしむ
風鈴の音ともなふ心地よき風に安らふ日の出の窓辺
トラノ尾の花咲く鉢を先づめでてけさも支度を始めてをりぬ
ハンゲショウ衿を正すかの群生にいつも庭の宝に思へり

大塚　照美　兵庫

わが足の歩みも時に危ふけれど車椅子の身なり姉の暮らしは
ビル風とふ高層間を抜けるかぜ意識外なりき杖もたぬ頃
夜道にて挨拶される人の犬ひかり輝く首輪してをり
電車まつ歩廊にはたまた交差点に見上げて飽きず雲の造形
本棚に仲代達矢氏の著書ありて御名を拝借しき次男の命名
わが好む銘柄米が買へたよと娘が持ちく鳴門を渡りて

重き野菜かたに掛けたる足取りは冷蔵庫に待つ白玉ぜんざい
お向かひの柵より垂るる凌霄花の朱に近寄りて偲ぶ夫人を

三　好　規　子　福岡

右顧左眄(うこさべん)すること多き我なれど自ら決めぬ施設に入ると
大学生の女孫は京より四時間をかけ福岡まで会ひに来て呉る
婿に代はりスマホやアイパッドのメンテナンスをしてくれ棚も付けくるる孫
久びさにバスに乗り孫とランチに行く五島料理の刺身定食
ホテル取り一泊する孫と施設にて一緒に過ごせて嬉しき二日間
休日に子に連れられて遠出する海の中道ぬけ志賀島へ
見はるかすビロードのやうな若草の高原走る子の横に乗りて
早緑の木木の間を抜け山藤や山帽子の花みる施設を出でて
新緑を漏るる日を浴び鶯を聴きつつ露天の湯に足のばす

須　藤　紀　子　埼玉

羽化したる揚羽は蛹につかまりてためらふごとく羽を振りをり
巣立ちたる燕の子らは鳴き交はしやがて散りたり餌を求めて
この朝に巣立てる五羽の燕が日暮れの空を縦横に飛ぶ
スイカズラ枯れたるアーチ我が物に凌霄花の茂る勢ひ
故郷をはるばる離れこの国で働く人の笑みは貴し
広島の悲惨の後の八十年今ガザの子の殺戮止まらず
飢ゑさせた末に虐殺する者も人類なれば救はれ難し

人間の尊厳を知る良心を込めて残さるヒロシマ・ノート

佐藤　靖子　東京

月一度行くところへの乗りつぎを線にたどれば北斗七星
てるてるといふ童しき人形の一つの瑕疵は首吊るかたち
あらくさを刈りたる塀に土蜘蛛の巣のふくらみてあまた立ちをり
マカロンのやうな友にはマカロンを贈りてひとり満足しをり
歳時記を抱へて眠る猫の背の斜面にブラシをすべらかに当つ
池に浮くボールと遊びゐるジャガー野性の身より保護されをれば
他郷の橋開運橋に風運橋風運橋は不運橋にあらず
うだるほど暑きときには身の凍る寒さと二択す答のいでず

齋鹿　ミヤコ　神奈川

二百円から五百円となるチョコレート買はずに済ます今しばらくは
消費税を守ると言ひたる政治家は民を守らず何を守るか
古紙回収の人が笑顔で三つ呉るるトイレットペーパーいつもの三倍
九十二となる実家の兄嫁の顔の美し頬の冷たし
前日の姪の電話に兄嫁の生活動作の自立を聞きつ
兄嫁の出棺のまへひびく音くるま椅子の兄の唸り泣き
妹のわれを認知できぬ兄なまへ告げれば我の名呼びぬ
午後八時機内の座席にあかく差す雲の上の入日のあかり

江藤　ひさ子　大分

令和七年七月七日あら今日はラッキーセブンデイねと夫と外食
英名をクアッキング・グラスとて小判草押しつぶしたるがの穂を揺らす終日
高く低く緋紅色に咲き盛るノウゼンカズラ・モントブレチア
ひとり生えの二本のトマト収穫といふがの色に吾を待つ庭
「わが庭に熟れたトマトよ」とお隣に向かひに配るそれの二個づつ
「さあわが家も味はひませう」と庭のトマト二個先づは冷蔵明朝のため
何や彼や劣化の一途老化とは斯くなるものぞと萎む折りをり

鈴木　計子　東京

らおちやんと戸籍名平尾のわれ呼びてくれにしコーラスの友に会ひたし
旧姓と戸籍名とびかふクラス会名の出でざるもかかはりなくて
名を聞けば出席簿のわが前の人面影いまに重なりくれず
大幅に売場変はれるスーパーを往き来す幾度も会ふ人のをり
咲き盛る栗の花のいきほひの衰へわれにやすらぎ戻る
どの花もほかよりいつも遅れ咲く南隣りに家建ち二十年
解体と新築工事にはさまるる六月隣りの塗装加はる
絶ゆることなき花育てし斜向かひ取り壊されて平らになりぬ

石渡　静夫　茨城

紫陽花の寺で知られる雨引山県外ナンバー次々来たる
山門に四本開くアート傘一際映える撮影ポイント
甘酒と芋菓子売場の並びをり商魂たくまし本堂前は

多宝塔の屋根は大きく反り返り後ろに迫る筑波山系
山陰に猛暑を避けてひつそりと青紫の紫陽花は咲く
カラオケの代表吾に美味しいとジュースをくれる会議の前に（芸能協会）
少しづつ顔と名前を覚えつつ議事を進める緊張の中
親雀警戒しながらパンを食ひ我と目が合ひぱつと飛び去る

西　村　邦　子　兵庫

花とぢて池の辺りは静もりぬ茜色に水面は染まる
木洩れ日の光を集めて咲き誇るジベルニーのモネの睡蓮
夕方の店先に並ぶ南高梅黄色く色づき半額シール
ジャム用に程よく熟する南高梅洗ひたるあとしばらく冷凍
男の孫の中学最後の公式戦背番号のユニフォームを追ふ
汗光る十五歳の少年ら涙と笑顔に残るあどけなさ
壁紙に今も残れるテープあと幼きころのストライクゾーン

高　橋　燿　子☆　埼玉

手伝いの夫が黄な粉を振りかけておはぎを作る義母の命日
義母の顔おぼろになれど嫁の日の厳しき教え今も守りて
「二人で商いしようか」気分良き日の義母は明治の気質
掘り上げたらっきょう漬けてこの夏の健康願い伸びする深夜
暑さの記録更新中コーヒーの香につられて集まる家族
足元のシロツメ草に「みつけた」四葉を手にした孫の大声

はけご下げ遠足は茅野競いあい蕨摘みたり若草の中
「道の草結びわなを仕掛けたね」幼き頃の話は思い出

与那国の旅

野　崎　礼　子☆　埼玉

与那国へ風切りながらプロペラ機雲くぐりて海をかすめる
与那国越しに見る台湾潮風に舞う白波きらめく
与那国の空に響かぬ島言葉この静けさに守りは潜む
草原に与那国馬の影ゆれて海を背にして風のゆるやか
草を食みふと立ち止まり糞をしてまた草を食むただ愛おしき
南海に浮かぶ与那国あのドラマ映しし浜辺今も変わらず
舌先に塩の一粒置くたびに島の泡盛美味しさ増して
ここにしか無いと聞かされ幻の泡盛二本迷わず買いぬ

飯　嶋　久　子☆　茨城

友去りて荒草茂る中庭に白き紫陽花今盛りなり
アナベルという名を知りて思いおこす若き日のフランス映画
ふるさとの小さな洋画専門館立ち見常なり苦痛覚えず
待ちかねしフランス映画「巴里祭」ヒロインの名アナベラと
初めての海外旅行巴里なりき会話はすべて夫まかせ
暑ささけ体力保持のウォーキングたそがれ近き田の道歩む
淡き月水平に見て三十分帰途には高く見上ぐる位置に
世界一大きな花臭い花ショクダイオオコンニャク目前なり

七月号作品一評

小林　芳枝

土筆萌え大犬のふぐり藤袴咲き初めにけり我は何せむ　　斉藤トミ子☆

冬の間固まっていた大地に生気が戻り、芽が出て花が咲く。春になれば私達の心も体も動き出す。私だって、という結句の自分への問いかけが核になっている。

忙しくやりたい事ができぬまま縛られていた頃の尊さ　　浜田はるみ☆

自分の時間が欲しいと願いながら忙しくしていた頃の充実感を振り返り、時間はできたのに嘗てのように動けなくなっている自分に気付く。やってみたいことがある、という気持に希望がみえる。

赤松の松の芽摘みは松の香の清かな五月初めの手仕事　　林　美智子☆

松の実摘みは毎年続けているらしく松酒ができるようだ。健康の為にご家族で作って居られるのだろう。他の歌にその様子が詠まれていて微笑ましい。

吉野山子に連れられて坂の道とどまり見渡す念願のさくら　　戸部田とくえ

日本屈指の桜の名所である吉野山の千本桜。一人で来ることのできない桜を目の前にした喜びと連れて来てくれた子への感謝が結句に籠められている。

窓越しの稲妻のあと数秒後に轟く春雷みみを塞ぐも　　大塚照美

窓の外にいきなり光が走り追いかけるように雷の音が轟く。子供の頃に光の速さと音の速さの違いを教わった事を思い出したが丁寧に詠まれている。

富士の見え鶯の啼き川に鷺翡翠のゐるこの地と別る　　三好規子

事情があって転居することになったがこの地への深い愛着が詠まれている。寂しさを乗り越えて新地での幸せを築いて下さるよう祈りたい。

鯉のぼり上ぐる家あり苗代をうすほす流れゆるやかにして　　須藤紀子

初節句だろうか、そうではなくても鯉のぼりは見るだけで心地よいものである。未来が明るくなるような雰囲気がある。下句のゆったりとした自然描写が上句によく合っていてリズムも良い。

古タオルウェスにせむと洗へるをまた使ひをりなにかなじみて　　佐藤靖子

私などもそろそろと思いながら、洗ってはまた使ってしまうものが時々ある。日常の中のふとした感じだけれどこの思いに同感できる。

葉の少し出でたる梅の隣りにて蕾を開きはじむ桜は　　鈴木計子

ご自宅の庭だろうか。花が終って新葉の出る梅とこれから咲こうとする桜の花に季節の進む様子がみえる。

念入りに風呂釜掃除をやってみるお掃除動画を参考にして　　吉田佐好子☆

風呂掃除はしても風呂釜掃除は頻繁にしないのではないだろうか。動画を見ながら、という所が現代風。順序良く綺麗になってゆく過程を楽しんでいるようだ。

心地よく電車の揺れてとろけさう次の駅にて降りるといふのに　　鈴木やよい

心地好い振動に浸っているうちに目的の駅に近づいてしまった。もう少しとろけそうになって居たいという思い。

七月号作品一評

藤田　夏見

あれこれと夢を追いたる頃もあり健康のみを願う現在　　高橋燿子☆

若い頃に目指した事、努力を惜しまずに過ごした日々を回想されながら、老年となった今をつつがなく過ごす事を乞い願う作者。万人に共有出来る歌です。

浮かび来る歌を書きとめ一週間パズルのように組み立ててゆく　野崎礼子☆

こころを動かされた事をメモに取り、一つの歌を作ろうと組み立てたり取り除いたり「パズルのように」作歌への姿勢。

大き芽をまずは摘み取り大瓶に松酒を作る楽しみもあり　　林　美智子☆

健康維持の為に松葉を酒に浸けておられる。庭の松の剪定の際の最初の作業なのだろう。松葉の効能の素晴らしさを知る作者の楽しみでしょうか。

少しずつ伸びゆく日差し少しずつブドウの新芽新葉に育つ　　松中賀代☆

葡萄の苗を育てる日々。小さな変化を喜び日差しが伸びるごとに葡萄の葉のひろがりを確かめる作者の喜びが見えます。二度の少しずつは作者の目の動き。

下草に菫たんぽぽ菜の花と春詰め込んで桜の並木　　本郷歌子☆

桜に誘われて来た。ゆっくりと目を移せば下草に静かな花達のもてなし。桜並木は春を詰め込んでいるのだ。

歌の控へに夫の子らに描きやりし猫は尾を立て蹲りをり　　稲津孝子

子供達が幼い頃のことだろうか。夫が歌を詠み記した紙の余白に、飼い猫の尾を立てうずくまるスケッチが残されている。それを懐かしむ作者がいる

置き忘れて帰れる孫のハンバーガー馳走になります何年振りに　　大塚照美

孫の訪れに食事の用意をされたのだろうか、ファストフードのハンバーグを持ってきた孫はそれを食べる事なく帰ってしまった。あらあらと思いながら作者は何年振りかしらと、馳走に預かった。

鯉のぼり上ぐる家あり苗代をうるほす流れゆるやかにして　　須藤紀子

田植え用の苗は苗代に青々と育っている。そこに流れ込む水路を眺め、目を転ずると鯉のぼりは空を泳ぐ　田園風景。

鯉幟間隔狭く吊るされて息苦しさう風も入らず　　石渡静夫

吊されているのは十四匹、間隔は狭く風も入らない。息苦しいだろうに、布製の鯉幟の泳ぐ事さえままならぬ姿。

有限で唯一だから取り戻さう私の声と私の歌を　　中島千加子

最近の作者の歌は一月置きに発表されているようです。ずっと前に大会でお会いした時の溌剌とされていた姿を知っています。唯一無二の歌を楽しみに読ませていただいております。

夏のごとき日差しを進むベビーカー幌よりはみ出る足はむつちり　　鈴木やよい

ベビーカーから覗いたむっちりとした赤ちゃんの足の愛らしさを目が追ってしまう作者。夏のような日差しを避けるように上半身は幌に覆われているのだ。素敵な歌につい微笑んでしまう。

九月集

もう少し撥ねよとこころは言ひゐるに言ふ事聞かぬ指のもどかし
トマト苗植ゑつつ願ひし好物の実を頬張るまでの夫のいのち
老い猫の悠悠自適庭石に寝そべりゐしがのつそり去りぬ
缶ビール糖質ゼロに気をとられ飲めぬ大缶夫買ひ来し
先週の高齢者大学サークルに顔みし人をけふ黙祷す
ヒトラーの演説したるホーフブロイハウス陽気に民は飲み且つ歌ふ
じやが薯と大いなるソーセージを朝より避易しつつ食べにきドイツに
喧騒のホーフブロイハウスを思ひつつジャーマンポテトを時に作りぬ

梶尾栄子　兵庫

スカシユリ青き莟の今朝開き白とあか二輪向き合いて咲く
夏野菜の勢いのびて早早と胡瓜五本の初生り切る朝
朝どりの胡瓜に塩振りぱきぱきとこの年の味を独りたのしむ
百日紅窓の近きに伸びる枝照りつく日ざしに紅の花開く
わが畑に咲く半夏生を友人は地区に知らすとスマホに写す
朝顔の緑のカーテン元気よく蔓競り合いて棚に広がる

児玉孝子☆　愛知

珍しく屋敷にイタチ現われぬ鉢植えの間より目の合う一瞬
一泊の旅を娘に誘われる暑さ忘れる昼神温泉

川上美智子☆　高知

蛍狩りの友等二人を出迎えて連れ立つ神社の傍の谷川
見詰め居る闇に一つが光りたり蛍の煌めきその後次々
数を増す源氏蛍の煌めきは水辺の上から神社の森にも
傍を飛ぶ蛍にそっと手を出せばふわり掴まる中指の先
この景色いつまで残るこの里に蛍はふっと吾の手飛び立つ
唐黍は背の丈程に育ちおり葉陰に今も友居るような
奈良に去り一年過ぎて友の言う「この地に馴れる日まだまだ遠い」

奄美大島旅行　加藤富子☆　栃木

密やかな会話の声も心地よく高速バスは羽田に向かう
雨多き奄美の自然山々は低くつづきて緑冴え冴え
アダンの果実が迎えて呉るる美術館田中一村は栃木の生まれ
一村の絵画の中には数々のアダン描かれて南国の風
マングローブ初体験のカヌー漕ぎ説子さんのアドバイスに一人乗りとす
全国参加の三十余名の離島ツアーに我等佐野市の仲間が四人

藤田夏見☆　広島

梔子を裸木にする勢いの青虫掴み捥ぎ取らんとす
鯛めしと栗きんとんを鮮やかに今年も染めよ庭の梔子

シジミ蝶ツマグロヒョウモン　アゲハ蝶青大将も猛暑の庭に
一匹のオオスカシバの産卵を見つけてしまう七月一日
ひとつずつ梔子の葉に卵産む許せざるものオオスカシバは
梔子のみどり深まる実と若葉に灰を撒きやる虫よ寄るなと
その庭に笹百合咲くと手を引きて鬼百合を指し頬笑む媼
「もう一度元気になるよ」とゆっくりと帰りし友のその後は会わず

小林　貞子　山形

去年に見し枝に下がれる棘の実の丸く小きを楓の実と知る
花弁の玉の朝露手に受けて有るか無きかの薔薇の移り香
思慕と言ふ花言葉持つ捩花の紅の螺旋の先の危ふさ
私達出会はなければ良かつたね茄子の葉裏の芋虫三寸
年年を数多実りてくれし梅豆粒程の頃に落果す
亡き母を偲ぶよすがの梅仕事陽に干す香り今年流れず
照り梅雨に川涸れ涸れと底見せてしみらにすがらに熱き風巻く
七を三つ重ねて今宵星祭北へ流るる銀河はおぼろ

佐藤　幸子　山形

朝の庭に梅干しをれば裏山の憂ひ漂ふ青鳩の声
屋根の上に風見鶏のごとく凛として鴉が止まる何か銜へて
デストロイヤ―と言ふじやが芋の葉茂りきて紫の花数多咲きゐる
時折に鋭き音声響き来るは友の畑の害獣避けアラーム

瓜坊を五匹つれたる猪が田の畔通る七夕のあさ
菅笠の夫は青田の真中にて点になりゐる炎天の下
売るわれも求める人も渾名にてメルカリ販売の蕨干し五袋
包装紙で妣の作りし額入り向日葵セロハン換へて玄関に飾る
掌に入るちひさな鼈甲の櫛見つけたり母の小箪笥

藤田　英輔☆　高知

探し物は見つけられずに染み染みと空を仰ぎぬ傘忘れきて
遠年の梅焼酎を飲みながら今年の梅をシロップにする
真ん中をショベルのごとく掘り握る幼の手には白き食パン
おさな児は自分の宇宙の中にいる梅雨の最中の透明の傘
「おかあさんといっしょ」をママと観られずに祖母と観る児の梅雨晴れの顔
ささやかな日々過ごしいる母と児の「じゃあね明日」と今日の「オヤスミ」

井上　鈴子　山形

伐ると言ひまた残すといふ柿の木は甥の気持のごとく葉が揺る
大船渡に農家研修に行きたると姉より届く「サラダこんぶ」あまた
立葵は下より花が咲き初むる天辺まで咲く梅雨明けを待つ
コロナ禍のゆり園閉鎖に配られし球根家々にいまも咲きつぐ
雨催ひの取り取りの百合の香のなかの白百合のそば朝霧草生ふ
ゆり園の「おはなみ台」に上り見れば岩山の上のライオン気分
帰りぎはデルフィニウム二つ求め庭先に植う青色が照る

残響集

田畑の所有権移転手続きの容易さもあり「贈与」を選ぶ
田畑を作りくれゐる親戚に筋道として相談なさむ
親戚ら二人に電話で確約す「帰郷の折にぜひ会ひたし」と
耕作の遺棄地とならざる田畑は彼らの助力あればこそなる
登記簿の写し携へ乗る汽船波路はるけき海渡りゆく
下船して向かふ農業委員会ほどなく済ます事前聞き取り
郷までは約一里なり山裾を車走らす懐かしき道
この道を歩き通ひし高校生かの三年の雨の日晴れの日
荒れ果つる生家の庭の寂しさの極みは父母思ひてやまず

岩村知康　長崎

わづかなる潮のたまりに小さき蟹生きてゐたれば嬉しかりけり
リハビリにて共に鍛へてゐる友の闊達なれば学ばむとする
山野草の青くちひさき花もてり去年にその名を聞きしに忘る
茶請けにと高価な菓子にもてなせば犬にやるとて老持ち帰る
ひと時に心ゆらぎて過去のことしきり思はるるこの花の青
山峡の温泉に入り里人を真似て寝ころぶ気安さのよし

佐々木政子　岩手

濁流の大きうねりに青杉の根の沈みつつ木肌の新し

立石節子☆　東京

高齢者健診受けし通知書に身長二センチ増体重一キロ減
クラシック聴き慣れし耳驚きて近現代のピアノ曲聴く
ピアノ弾く腕の筋肉浮き上がり優しき顔に不思議な一致
イスラエル元兵士の講演に多くの人は頷きつつ聴く
急に夏急に冬来て出番なし春秋の服美しきまま

長谷川剛　山形

初生りの胡瓜を妻と分かち食む苦労重ねた大地の香りす
雨上がりひたぶるに抜く庭の草蟹のごとくに這ひつくばりて
「あんぱん」に戦の惨さ見るたびに平和の尊さ胸にと沁みる
初任地の荒廃すさぶ学び舎は丘の上に立つ古城のごとく
難解な問題解いてゐたやうな子育てのころいま解き放されつ
ゆふぐれに熊野の社の鐘が鳴りやすらぎ覚ゆ聴きなるる音
貧しくも子供ら揃ひてチャンバラゴッコ主役はいつも赤胴鈴之助

首藤文江☆　埼玉

驚くはこの生姜まで高くなりほんの数ミリ惜しみつつ切る
我が息子ミルク飲ませるその姿父親らしさ板につきつつ
コロナ禍の異様な時は過去となり道の片隅にマスクが一つ
梅雨空の急に暗みて畑仕事残し農夫は家路を急ぐ

（☆印は新仮名遣い希望者です）

七月号作品二評

井上　菅子

ごろごろの溶岩帯の登山道皆よぢ登り
艶増す岩の　　益坂順子

「ごろごろの溶岩帯」は、いかにも歩きづらい難儀な道。その上急斜面の様子が、人の手の脂で艶々になった岩。その岩を眼前にするような臨場感がある。

出番多きハラスメントという言葉昔は
誰でも嫌な目に遭いき　植松千恵子☆

パワハラ、セクハラ、報道では大きく取り上げられる。昔はそれを問題視しなかった。意識の変わった時代を詠む。

いつの間に緑の増えたミカンの木枝葉
の中に白い花咲く　　早乙女イチ☆

緑と白で色彩が爽やか。「枝葉の中に白い花咲く」ここには枝葉の繁った様子が観察された。

林には野鳥の呼び合う声響く遠く近く
にやまびこの如　　川上美智子☆

野鳥にも恋の季節だろう。「呼び合う声響く」ここには、やさしい気持で野鳥に向き合う作者を見る。たくさんの野鳥がいる林。自然の豊かさが羨ましい。

キツツキの木を突く音ウグイスの鳴く
声がしてヤマガラが水浴びをする
　　卯嶋貴子☆

第四句までが定型通り、結句が十二音という歌だが、三種三様の鳥の様子が鮮明で、結句が情景を引き立たせた。

この店の大判焼を好みゐし兄に供へむ
と五つ求める　　大野　茜

「この店」と得定したところで意味を深めた。大判焼きという庶民的な味を好んだ「兄」の温かな人柄が想像できる。

一服の茶に癒されて飾られた鉄線の花
に涼しさ覚ゆ　　永野雅子☆

初夏の茶房の設いが鉄線の花で絵のように見える。鉄線のなよやかな一茎が清げに風情を出していたのだろう。

山火事の巨大さ示す山肌は赤茶色のま
ま芽吹かぬ木々見ゆ　　津田美知子

大規模な大船渡の山林火災、爪痕をまざまざと見るような一首。「赤茶色のまま芽吹かぬ木々」は、根まで死んでしまったのだろう。痛々しさが伝わる。

だんだら坂きつく感じる老の足桜散る
道茶室に続く　　谷田律子☆

桜の花びらが散るだんだら坂、それが静かな茶室に続く。何と美しい日本の風景だろう。老いだから見える景色もある。

爽やかな白い牡丹の花の咲く匂ひなく
とも引き寄せらるる　　野口秀子

白くて大きな牡丹の花、そこは音の絶えた粲々と明るい別世界。白牡丹を見るときいつも私は思う。牡丹の魅力に共感。

あれこれとたずねることの多き吾れに
寡黙な息子静かに笑まう　小嶋知葉☆

久しぶりに息子に会った嬉しさに、次々と話しかけたのだろう。「寡黙な息子静かに笑まう」には、大きな抱擁力で親を見ているやさしい息子の像がある。

トンネルはなまはげの口赤鬼のなかを
潜りて男鹿の地に入る　　井上鈴子

なまはげは秋田県男鹿半島周辺の年中行事。鬼の面は至る所で活躍し、トンネルの入口にまで。具体的ななまはげの描写で、地方色が色濃く詠まれた。

七月号作品二評

江波戸愛子

この年も銀竜草に出会ひたり樹林の中
のさはやかな白　　益坂順子

毎年登山の計画を立てて実行している作者の楽しみの一つなのだろう、銀竜草の花に今年も出会えた喜びを詠む。

国産のバナナ一本二千円作る苦労思い
パクッとはいかぬ　　植松千恵子☆

国産のバナナは無農薬で皮ごと食べられるので値段も高いが安心して食べる事ができる。そのバナナを育てている人たちへの思いが優しい。

高高と柚子の実生ってそよ風にゆれて
爽やか取るのは大変　　早乙女イチ☆

色づいた実とみどりの葉の風にゆれる様子を爽やかと詠んで見上げながら、その木の棘を憂う。

山裾より湧き出づる水ちょろちょろと
細き流れの音心地よし　川上美智子☆

「ちょろちょろと」に水の音が読む側にも聞こえてくるようです。近くに湧き水の音を聞くことのできる喜びを詠む。

キツツキの木を突く音ウグイスの鳴く
声がしてヤマガラが水浴びをする
　　卯嶋貴子☆

以前から鳥を詠む歌を読ませていただいているがこの一首も作者の家の近くだろうか、それぞれの鳥の動きを声を楽しんでいる作者がうかぶ。

母倒れ仕事と看病背負ふ甥昨日の電話
の疲れたる声　　大野　茜

母親の看病と仕事をしている甥からの電話の声に大変さを思いながら話を聞いている作者、話すことで甥御さんはすこし心が軽くなったのではないだろうか。

還暦の祝いの席を設けると娘婿から言
われ感謝す　　永野雅子☆

娘婿さんから作者の還暦の祝いの話を聞いたよろこびが下の句に溢れている。

夫と吾ゆったりと飲む珈琲は少しの会
話と鳥の囀り　　津田美知子

長い年月を共に暮らしてきたご夫婦の絆をつよく感じる。以前に「生まれ変わっても一緒になりたい」と詠む歌がある。

カブに似たビーツの収穫おそるおそる
引き抜いてみた見事な出来ばえ
　　谷田律子☆

初めて植えたビーツの生育の不安が、喜びに変わる心の動きがよく判る。

爽やかな白い牡丹の花の咲く匂ひなく
とも引き寄せらるる　　野口秀子

華やかな色の花も美しいが白い牡丹にはまた違う魅力がある、下の句にうなずく人が多いのではないだろうか。

久久の息子の帰省に好物のたけのこ料
理に腕ふるいたり　　小嶋知葉☆

久しぶりに帰ってくる息子さんのために好きなたけのこ料理を作っている母親の気持ちがまっすぐに伝わってくる。

梅・桜・チューリップ・木瓜・水芭蕉
一時に咲き里に春来ぬ　　井上鈴子

雪国にお住いの作者、春の花をならべて春が来た喜びを詠む。

去年遅くばら蒔きしたる茎立の若菜お
ろぬき今朝の味噌汁　　奥山清子

冬の間に育った若菜は甘みがあるらしい、その若菜のおいしい味噌汁を詠む。

七月号作品三評

山本　三男

ワーズワース詩集を買ったあの夜は旅先だった金沢の街　　新井光雄☆

口語で書かれたこの歌は、ワーズワースの詩を連想させます。旅先だったという金沢の夜は詩情あふれるものだったのでしょう。「あの夜」という言葉は特別な夜だったことを思わせます。

片羽となりて死にたる蝉一つ玄関前に陽を浴びてをり　　佐々木政子

死んでいる蝉に当たっている陽の光が印象的な歌です。玄関前という場所は日常生活を感じさせる場所ですが、そこにある蝉の死骸は、毎日の生活に追われる中で忘れていたことを思い出させます。

「紅孔雀」聞く楽しみで帰宅する貧しく遠き日のなつかしく　　山﨑　猛☆

まだテレビの無かった時代に続きもののラジオドラマ「紅孔雀」を聞くのが楽しみで帰って来た子供の頃を思い出しての歌でしょう。この歌に使われている貧しくという言葉は経済的な貧しさを言っているのであって、精神的には豊かな時代だったかも知れません。音声だけのラジオドラマには、テレビにはない想像力をかきたてるものがありました。

これなあにどうしてなのと繰り返し呪文のように孫に問われる　塚本節子☆

お孫さんにこのように繰り返し問われることに困っている訳ではなく、むしろ喜んでいるのでしょう。幼児がこのような質問を繰り返すことは成長の過程にある事で、この頃が可愛い盛りです。

独活・蕨・こごみ・薇・蕗の薹リュックいっぱいあふれる五月　　羽田孝輝

色々な山菜の名前が出てくる歌ですが、リュックいっぱいとあるので、それらは皆、里山などで採れたものでしょう。このような山菜はいつでも採れる訳ではなく、この季節だけのものです。結句の五月という言葉がよく活かされています。

病後の夫弱き力で餅を搗く振り上げる杵に孫の助太刀　　長澤千恵子

助太刀という結句がピッタリです。餅搗きの歌が三首ほど続いていますが、ご家族で協力している様子が分かります。餅搗きは久しぶりのようですが、特別な意味があるように思われます。

読み聞かせし絵本飾りて眺むれば孫の温もり昨日のやうに　　今野澄子

「昨日のやうに」という結句から推測すると、お孫さんはもう大きくなっているようです。絵本を眺めると、かつてのお孫さんの温もりを感じるのでしょう。

部屋の中ぐるぐる回る掃除ロボ猫が居るようで名を考える　　今福﨑子☆

最近は掃除ロボットが勝手に部屋を掃除するようになりました。自動で動き回る様子はまるで猫のようで、思わず名前を考えたくなったのでしょう。

初対面に名字の漢字の説明は四十年経てば慣れたるものに　　河原木光子☆

四十年というのは、結婚して名字が変わられてからの年月だと推定しました。珍しい名字の説明に当初は苦労したのですが歳月を経てそれも慣れ、今ではこの名字に対する愛着を感じます。

七月号作品三評

橘　美千代

きしむ音ひびかせ電車遠くなり人無き駅にわれは下りたり　　佐々木政子

事情や作者の心情など詳しいことは分からないが、一首を通じて孤独と寂寥の音色が根底に流れていると思う。列車の軋みは、常日頃自分を抑えている作者の心の軋みかも知れない。下の句何処かこの世ならぬ地におり立つかのようだ。

涅槃図の数多の動物その中に象も泣きをり慎み拝す　　同

一連に死を意識するかの歌が散見されそれゆえ涅槃図に気持ちが向いたのだろう。釈迦の死に際し人間だけでなく様々な動物たちも泣いている。鼻を振り上げ泣く象に注目した作者の視点が冴える。

キッチンに筍ゆがく香り満つ今宵はシンプル土佐煮を味わう　　塚本節子☆

筍のあく抜きのため煮込む時辺りに香りが漂うのは誰もが経験すること。ゆがいた筍をだし汁と醤油とみりんで煮込み仕上げに鰹節をまぶす土佐煮。まことに良い香りがしてきそうだ。筍への愛に溢れ季節感も満喫できる歌。

大雪で潰れたるハウス無惨なりビニール暴れる五月の風に　　羽田孝輝

大雪でビニールハウスが潰れるという惨事に見舞われた作者。そのショックは未だに尾を引いている模様。未だ片付けもできていない。無惨に破れたビニールが風に吹かれ激しくはためく。いつもなら爽やかで心地よいはずの五月の風に。

間合ひ取り突いて去なしてその刹那剣先撓りてパンと面打つ　　長谷川　剛

剣道の立ち合いを詠んだ歌は殆んど見かけず斬新だ。突きを仕掛けるための距離をとり一気に突きを入れ、攻撃を去なした剣先を撓らせ面を打ったという。素早い判断と動き。息詰まる瞬間を緩みのない張り詰めた調べで表現する。

病後の夫弱き力で餅を搗く振り上げる杵に孫の助太刀　　長澤千恵子

帰省したお孫さんと病後の夫君とを交えての餅搗きの様子が詠まれている。臼を転がして玄関に運んだり米を蒸す段取りをしたり準備に気分が盛り上がっていく。病後の父君を孫が助けて杵で餅を搗く姿に家族の絆の強さが表れて。

そちこちに畔焼く煙棚引きて刈田の日暮れ人影一つ　　松田忠一☆

畦の草を刈り取った後に焼いているのだろう。春の終わり、初夏、秋などに行われるようだ。季節により焼かれる草によって煙の色が変わるとか。筆者の地では秋に籾殻を田んぼで焼いてその煙があちこちに立ちのぼり山間部ではけむい程のことも。この煙とにおいに秋を感じる。歌では日暮れに刈田に立つ人影が一つ。ミレーの晩鐘の絵を彷彿とさせる光景だ。神聖な労働を終えての祈りの刻。

青魚食べられぬ夫の留守中の昼の食事はサバ缶を食む　　河原木光子☆

青身の魚を作者はお好きなのだろう。夫君は食べられないという。二人の食卓にはのせられないため、夫君の留守に一人で味わうと。手軽なサバ缶を。夫君に気を遣うところに愛が感じられる。

作品二

小林　芳枝　東京

眠りたるのちも涼風送りくる昨日エアコン今日扇風機
掃除機のハンディタイプ傍らに置きて手狭な部屋にて過ごす
猛暑日になるといふ朝ベランダにバジルのみどり光りつつ揺る
三日前の煮物の残り大根に染み入る味のあまく冷たし
朝食のパン時かけて食べてをり八十一歳までもう一か月
エレベーターに乗り合せたる蚊の羽音去年も聞かず今年も聞かず
浴衣着て隅田の花火見るといふ十七歳は極暑をたのしむ

本間　志津子　山形

駅近き街路樹に吹く風のあり行き交ふ若きら足どり軽し
さくらんぼ二年続きのキャンセルは作柄不良のゆゑなるときく
店を変へやうやく願ひ叶ひたりさくらんぼわが孫にも届く
さくらんぼの産地は北へ移るのか温暖化ゆゑの減収なれば
朝の雨ふとも明るむ気配あり青空覗く午後の梅雨晴れ
雨上り稲田のみどり濃さを増し苗の丈伸び風にそよげり
最上川河口にありてゆつくりと沈まぬ太陽中天にあり
夏至の日のバスを降りたる六時半いまだ明るき空に戸惑ふ

東　ミチ　青森

生前に夫が山林の手入れせし鋸で庭の椿を間引く
大木の椿の枝を間引きする幹が現れ空も見えくる
ズボン丈踵に引きずるやうになりリハビリにこの裾も二センチ切らむ
キンギョ草を植ゑて知る華やかなフリルが一枚の花びらなるを
小鳥来て庭にすがしき声に鳴き心の霧が少しうすれる
長生きの時代に生かされ嬉しけれど身体の辛さに分別を欠く

植松　千恵子　静岡

夫の喜寿過ぎたる父の日に孫達が揃ひて花束持ちて来たりぬ
恥づかしいと息子に言はれ花束を嫁が手配す孫の手紙と
昭和の美空ひばりと長嶋を亡父は酔ふと歌ひ語りけり
亡くなつて色々知りぬ豪快な背番号3の繊細な面
白寿の叔母今日も畑へ押し車畑が好きさと楽しげに行く
方言の民俗学の講義にて県の東西の違ひ多々知る

早乙女　イチ☆　栃木

小雨降る青葉の中にキンカンの白い花見ゆ生ってくれるか
ミカンの実大きくなって重たげに下っているよ少し取りたり

松居　光子　三重

梅雨に入りて程なく襲ふこの猛暑はや梅雨明けかと思ふ数日
戦なく平和な世界を願ひたる幼き文字の短冊揺るる

頬の疣の治療の跡の瘡蓋を気にしつつ外出すマスクをつけて
右の目の白内障の進み来て新聞読むも難くなりたり
左目をたよりに読むも疲れやすく拡大鏡を使ふこの頃
不自由から解放されたし白内障の手術の予約済ませてきたり

山本述子　神奈川

小学生の日傘登校徐徐に増え時には仲良く相合傘も
ベランダのゴーヤ次次実りきて何の不足か曲がりの多し
取立てのゴーヤの苦み夏バテに効くと思へば味はひ深し
隅隅の掃除に励みピカピカの流し台にて顔写しみる
蒸し暑き部屋にもあちこち緑葉を飾る涼しさ得たる気のして
糀から甘酒作り朝夕に飲む点滴と称し頂く
ベランダのカサブランカの花の香のドア開くる度部屋に漂ふ
飼ひ兎涼しさ求めクーラーの下に居座り満足げなり

川俣美治子☆　栃木

真夏日の夕暮れ風が吹き始めどこぞで雨か紫陽花揺れる
道尋ね返る言葉のやさしさに見知らぬ土地で心がゆるむ
流れくる汗拭ききれぬハンカチに苛立つ午後はタオルがなくて
きゅうりなすいただきし夜の夏御膳新鮮さだけは高級料理
曇り空見上げて願う夜の雨水やりに迷う夕暮れの庭
インゲンもトマトもナスも暑さ負け小さな実にて摘むにしのびず

父の命日近づききたり今年またあの日の日ざし未だ忘れず
「文化センターこどもまつり」

永野雅子☆　東京

七月の文化センターこどもまつり二週間後に近づきたり
職員からボランティア用弁当の注文貰い思わず笑顔す
弁当の数増えて日曜出勤を娘にも頼み準備整う
十一時の販売開始を逆算し出発時刻を十五分前と決む
販売の開始と共に商品はどんどん売れて追加の電話あり
チャーハンが美味しくて又買いますと客に言われて嬉しさいっぱい
午後二時に店に戻りて売上を確認すれば過去最高額
午後三時ショートステイの施設へと母を迎えに行く日傘をさして

大野茜　神奈川

挑戦とふ言葉使ふは似合はねど翻訳機買ひ英語をかじる
常日頃頼る大工は一歳の娘を抱き来て満面の笑み
刺多き柚子の葉群に百舌の入り虫を探しぬ首きよろきよろと
誌に知りて会へれば話の一つでもと思ひたる方の急逝の記事
丘の上の我家下れば直売所取れ立て野菜を求めて千歩
お笑ひとグルメ溢るるテレビに飽きラジオ聴きつつ秋旅プラン

安川敏子☆　埼玉

純白の打掛けの如き白百合が八重にゆっくり夏の朝開く
鉢の花の入院中の水やりを続けくれたりアガパンサス咲く

ウイーン少年合唱団の世界の子声爽やかにして歴史を感ず
末広がりの八十代の驚きは毎年病みて服薬ふえる
病んで知る変らぬ家族の愛情と包んでくれる手の暖かさ
怪我をして炊事も家事もできなくて「ワタミ」にたのみ急場を凌ぐ
雨の中五千メートル走る女子全身濡れてその脚光る

谷田律子☆ 栃木

ノウゼンカズラ乱れて落ちて風に飛ぶ住む人のなき住宅の庭
ひまわりの種をさかなに呑むビール猛暑の夏の昼下がりも良し
日焼けした息子の顔に年を見る思えば我も八十路を過ぎぬ
塾の英語何度読んでも忘れてしまう八十路の我の頭脳よ如何に
白壁に硬く張り付くカタツムリ炎天の陽を強く受けつつ
窓越しにつばめ飛び交う姿見え子雀たちの声もにぎやか

益坂順子 福岡

突然に大先輩の訃報聞きあの日あの時つのる思ひ出
「冬雷」に短歌の無きこと尋ねたるその日の会話最後となりて
親友に受話器とほして「さよなら」の言葉ありとふ心中思ふ
初市に求めたる庭木の三十年ため息まじりに見上ぐるのみの
突然といふがに誘ひのメール受くツチアケビたつ八方岳登山
この山に一株のみのツチアケビ実となる時季を指折り待ちき
「これだよ」と言はれて気づくツチアケビ山に溶け合ふ色もかたちも

この頃の野菜の新種目につきてけふ手にしたる玉蜀黍の白
プチプチの食感たのし小粒にて白雪姫といふ名つきをり

卯嶋貴子☆ 東京

六月にかんかん照りの日が続き梅雨はどこかに行ってしまった
ドラゴンフルーツの鉢二つ今年の母の日のプレゼントにもらいたり
一ヶ月過ぎてドラゴンフルーツに新芽出てきて添え木をしたり
拾いたる日より三年足折れのカラスはわが家の家族になりぬ
買物に通る度見上げる樅の木はわが家のカラスの誕生の木なり

水澤タカ子 山形

卒寿すぎひと日ひと日を無為にすまじ天と地と人に感謝忘れず
五十一回茂吉記念全国の集ひへ心はづませ友と上山へ
受付に「弁当」の歌題をもらひ受け茂吉弁当食べつつ歌を練る
十八種の茂吉の好みし品はひる弁当うまし歌は生まれず
斎藤茂吉短歌文学賞を受けたる本多稜氏の話は心に沁みる
本多氏の歌集『時剋』選びし三枝氏の話に聴き入る病に負けぬ歌
斎藤茂一氏の挨拶は常に皆をくつろがす白髪ながら
田村元氏の「斎藤茂吉の飲食の歌」をたつぷり聞きて満ち足り帰る

野口秀子 山形

立派なる紫陽花の花は十日経ち玄関に飾るも勢ひつづく
夕方に赤き桜桃届きたりもう最後だと大将錦を

沢山の空き手提げをば娘は持ち来　食器を整理せんとの思ひに
朝風を浴びて芝生に思ひをり今日一日の穏やかなるを
宵闇に窓閉めをれば真赤なる満月昇る舞鶴山に
明日の日も猛暑となるや満月の明るさ身に染む夜空は澄みて

松　﨑　みき子　岩手

梅を採り籠を背負ひてうぐひすの声と一緒に山降りゆく
種類多き鰈の名前の見分け方覚えゐたりしが今は自信なく
高騰の米問題を語りゐる参院選演説どこまで真か
湿気高い暑さとなりてこの夜はエアコン無き部屋に雨音響く
庭の草夢中で抜きて汗を拭く蚊取線香の煙途切れて
開墾の畑に咲いたグラジオラス切りて飾りて玄関華やぐ
梅干になるその日まで日に何度漬樽覗き具合確かむ

津　田　美知子　岩手

覚え書き一つ加はる命日は幼馴染みの公ちやんの事
白白と夜明け近づく静寂に出漁の船と時計の音す
濃き霧に真夏の太陽遮られ上着一枚羽織る涼しさ
沖の霧浜風と共に流れ来て暑さ凌げる自然のクーラー
ＭＲＩ検査「年の割にはきれいです」の吾の結果に病む夫喜ぶ
ツツジ咲く庭に飛びくる蝶のあり義母かと思ひながら見てをり
穏やかな顔に紅さす納棺師百歳の義母いよよ旅立つ

百歳の義母にピンクの死装束先立ちし義父にまた会へるやう

小　嶋　知　葉☆　茨城

報道の深さに心熱くなる七月五日新プロジェクトX
弁護士と愚直なまでの一記者のタッグ稔りて冤罪暴く
少しだけ障害を持つ看護助手実刑十五年獄中にあり
両親にあてたる手紙八百五十通「わたしは殺していない」と綴る
判決は無罪となるも失われし十五年は戻ることなし
「無罪」に続くことばのあたたかさ「もう嘘はつかなくていいのですよ」
猛暑日に知りたる言葉フレッシュに自分をいたわる「セルフコンパッション」
十八歳の孫との密着一週間七月末にはロスに出発す

奥　山　清　子　山形

歯止めならぬ関税措置に世は乱る多弁恨めしトランプ大統領の
伐られても脇からぐんと徒長枝の芽吹く栃の葉誇らしく見ゆ
肩痛め草を毟らぬ庭の辺に真白く咲ける蕺草の花
紫の「みやこわすれ」の名に思ふ佐渡に流されし順徳天皇
連作を厭ふ胡瓜を何処にせむ狭き庭畑ぐるぐる替へて
所属する体操教室四人退め今日より私が最高齢なり
揉みに揉む第二の心臓といふ足の小指の先から脹脛まで
膝痛の予防に「スクワット」五十回レッドコードに身を委ねつつ

作品三

羽田　孝輝　山形

今朝逝きたる兄に並びて添ひ寝せり白布取りて何度も見つむ
打ち覆ひ何度も取りて顔見つむ逝きたる兄に添ひ寝する夜
火葬終へ骨拾ひても未だ兄が逝きたることを受け入れられず
おどおどと聴診器を当て医師告げたり死亡確認八時八分
兄逝きて姉と二人で墓に参るまだ雨残る初七日の朝
兄危篤の知らせを受けて急ぐ朝尽くせぬことが頭を廻る
兄逝くをまだ分からずに亡骸の布団の上に猫は眠りぬ
残されたる猫は今夜も足の上兄の布団にまるく眠りぬ
兄逝くを心得たるか亡骸に猫は寄り来て頭舐めをり

畏友逝く　新井光雄☆　東京

認知症の友への電話を控えれば半年後知る亡くなりしこと
学者の友唯識論の一人者一人で編んだ唯識辞典
贈られた唯識辞典に恵存と新井光雄とおおらかなる文字
新宿の地下室で友月一度唯識論の勉強会を
友はまた「哲学カフェ」を主宰して月に一度の哲学問答
わが友は東大院で水産学学ぶも転部し文学部へと
文学部に我と同級さりながら二年の間お互い知らず

七月号　十首選

冬雷集　益坂　順子

ゆつくりと歩めばいつもの散歩道スマホにきざむ歩数の増しぬ　森藤ふみ
茶摘みには間のあるらしくひとりなればこころ安けく弁当ひらく　天野克彦
アカメヤナギの広き木陰に庇われて杖つく人がひととき憩う　高松美智子☆
開花日を知らせるニュース通り過ぎ何時しか人は暑さを嘆く　嶋田正之
おほひ立つ枝に若芽のひろがりぬ梢になほも花を保ちて　稲田正康
鶯の声ととのひて二声三声四方の山並み緑の照りぬ　田端五百子
まだ妻に言わねばならぬことあれど先延ばししてひと日過ぎたり　山本三男☆
名のみ知るいきなり饅頭いただきて動転してゐる老いの腸（はらわた）　姉川素枝子
藪の中に白梅咲けりかつてここに豊かな人の暮しがありき　井上菅子
花見ればどこか何かのほぐれゆく感じのしきり躰の軽く　大山敏夫

退職し奇遇で著書読み勉強会へ同級生が俄かに我が師
わが師友が得度したるは興福寺二人で拝見塔影能を

高藤　朱美☆　茨城

我が身より伸びたるトマト見上げつつ梅雨はこれからと頭かかえる
隣人の行ったり来たりする姿ありて草は通路より消ゆ
孫からのハワイ土産を待ちいたりマカダミアナッツチョコを味わう
ほおばれば甘味と酸味と皮具合い今年のトマトも味わいの良く
タチアオイ薄桃色の優しさに通院続きの気分和みぬ
知人逝きユーレイズミーアップ歌う参列者と聖堂に響く葬送の曲

山﨑　猛☆　埼玉

選挙戦の時のみ依頼の来る友の今年は来ずに安否気遣う
朝5時に起きれば外は涼しくて薔薇に水遣り安寧を祈る
メールへの文字入力を音声で書く方法に友は喜ぶ
駐車場無き銀行の出金にコンビニを使い徒歩を選びぬ
友よりの喜びの声都営住宅に入居決まると電話入りたり
トランプの全てが自国優先に拍車をかける物価上昇

塚本　節子☆　茨城

今年こそ甘きスイカを作りたく動画に学ぶ基本の技を
携帯の動画を観つつ子づるかき畑中に学ぶスイカ作りを
初めてのスイカの収穫五年前二歳の孫の笑顔なつかし

七月号　十首選

七月集／残響集　山口　嵩

これからの覚悟もなきまま七十代最後となる日の平平凡凡　梶尾栄子
孫どもと袋かけいる枇杷の実によりきて憩うかスズメバチ一匹　藤田夏見☆
新幹線を仙台駅で乗り換へて八十八歳の我が一人旅　東　ミチ
エレベーター・エスカレーターを横に見て一段一段貯筋に励む　加藤富子☆
畑仕事は出来ぬと冬に思いしに木木の芽吹きて遣る気出できぬ　児玉孝子☆
じやが芋の種ひと袋残りあり求めきたりぬ肩に背負ひて　水澤タカ子
「じいちゃんのビール」と言いて抱え来る君のミルクと乾杯をする　藤田英輔☆
杖つきて歩める妻の手を取りて歩幅合はせて歩む老いあり　佐藤幸子
苗植えし畑に五月雨降り注ぎ土の匂いの一面に満つ　越澤太朗☆
口元にシワを作るなポッキーをおちょぼ口でなく「イ」の口で食ぶ　金子八重子☆

藍の色滴るばかりの茄子を採る朝露の中初生りひとつ
コンサートベルひまわりの茎に小さなる蕾つきおり夏至のまひるま
ひまわりの茎それぞれの蕾十個満開となるブーケのごとくに
咲き初めたるひまわりの花命日の父の墓前を明るく照らす
居眠りをしている女孫をおんぶすれば重いでしょうと背にてつぶやく

金　子　八重子☆　千葉

白川郷雪の絶景映像を酷暑の今に見て涼を得る
添えられたキャベツに肉ダレ染み込んで主菜に負けぬご馳走になる
夏風邪の付け入る隙は無かりけり三度三度によく腹の減る
ファスナーの開け閉め試し新しい財布を下ろす一粒万倍日
防災の賞味期限の切れた水手洗い用と記して仕舞う
好物の薬味の茗荷の食べ過ぎと孫の誕日を忘れた言い訳す
足裏に張り付く畳を除湿して歩けば擦れて乾いた音す

井　出　裕　子　静岡

映画なれど「フロントライン」船内に何起こりたるかおほよそを知りぬ
未知の敵に不安と恐怖を抱きつつ人命救助に奔走する人ら
身を挺し立ち向かふ人や家族らの誹謗中傷受くるに理不尽を思ふ
映画観てコロナ感染終息の報未だ聞かざるを思ひ起こしぬ
近頃は幾多の言語行き交ひて我が片田舎にグローバル化進む
くじ運はなけれど一等の米当たる番号確かむスーパーのイベント

作品一

石渡　静夫

磯子駅のホーム一つだけにして簡素なるさまに十年親しむ　桜井美保子
あれこれと夢を追いたる頃もあり健康のみを願う現在　高橋燿子☆
美空ひばり好きだと話す大山先生身を乗り出して意外と陽気　野崎礼子☆
沈みゆく吾が心をば興さむと子らはスマホで気遣ひくるる　岩渕綾子
羅漢様さくら花びら身につけて春の面して座しておはします　倉浪ゆみ
日曜日疲労ぎみなる娘来て松の香に浸れば治ると手伝う　林　美智子☆
うぐひすの上達したる歌を聞くこの恋きつときつと成就す　村上美江
映像のアメリカに数多日本米五キロ二千円で売買の不思議　乾　義江☆
今年またあらがひがたく梅ひらき桜ちりゆき雪やなぎ白し　松本英夫
近く見ゆる那須連峰の頂上に五月といふにまだ雪が乗る　吉村昌子

早朝の畑は朝露たっぷりと小蜘蛛チョロチョロ露玉転げて
女郎蜘蛛ハウスの中は縄張りで貫録見せて睨み利かせる
ズッキーニ葉陰に育ちすぎていてヘチマの如き姿になりぬ
我が畑に蚯蚓が多く発生す土壌改良更に進めん
先輩が九十にしてトラクターに乗るを仰いで励みとなさん
初なりの西瓜ピンポン玉ほどに育ちひとなでして帰りくる

越　澤　太　朗☆　茨城

庭先に妻の育てゐる白紫陽花の際立ちて咲く花アナベルと知る
シニア集い「寅さん」を見る区民館久の笑いと人情深さ
妻と来て近くの寿司屋で誕生祝い刺身と冷酒と楽しい会話
妻からの誕生祝いのプレゼント木工作家の書見台なり
江戸資料館の米屋と八百屋と庶民の長屋一つ一つに昔をしのぶ
鶯のさえずり今日も盛んなり夏に入りても相手求めて
風薫るバス研修会の東海村原子の力を学ぶ一日

後　藤　恭　介☆　茨城

畑にて楽しみ貰ふ作鍬あり育つ過程と土の手触り
紅ランチハープの音色聴きながら食べる会話も味覚も楽し
中山の開放庭園巡り視るサボテンの花風の流れも
オープンガーデン何種類もの花咲いて水の流れに空気も香る

長　澤　千恵子　山形

作品二

大塚　亮子

ごろごろの溶岩帯の登山道皆よぢ登り　益坂順子
艶増す岩の
いつの間に緑の増えたミカンの木枝葉の中に白い花咲く　早乙女イチ☆
山裾より湧き出づる水ちょろちょろと細き流れの音心地良し　川上美智子☆
切る爪のうすくなったと感じつつ変わらぬ形に父を思いぬ　川俣美治子☆
この店の大判焼きを好みゐし兄に供へむと五つ求める　大野　茜
下手すぎるうぐひすの声の正体はリハビリ中の夫の口笛　津田美知子
子や孫達十三名のバーベキュー　ゴールデンウィークの駐車場にて　谷田律子☆
母の日を目前にして宅急便同時に届く娘と息子から　小嶋知葉☆
梅・桜・チューリップ・木瓜・水芭蕉一時に咲き里に春来ぬ　井上鈴子
庭の辺の蕗の薹五個揚げてをり香り漂ふ狭き厨に　奥山清子

何気なき友との茶飲み待ちてをり連絡はスマホのライン用ゐて
今野澄子　山形

ボールペンで腕に描きたる時計見て得意になりて時刻告げにき
我の身を守り給へと願ふより詫び多くなる母の命日
茄子植ゑて次にトマトを植ゑる間に冷えた麦茶に唸るひと声
辣韮漬においしくなれと呪文かけ瓶を覗いて変化見る日日
競ひ合ふ力作揃ふ書道展静かなる場に墨香微か
初摘みの大葉とパセリは冷麦の薬味に添へて涼しさ味はふ
河原木光子☆　広島

部屋中に捕らえきたる蝉みな放つ祖父と過ごしし少年の夏
田面船夜の宮島漂えり願いをこめて媼は作る
一瞬に竿に感じる重さあり黒鯛四十タモで掬いて
高根島眺めつつ家族で釣りをする思い出数多よ瀬戸田の海は
自家製の野菜の販売好評に六時に並び桃二個を買う
近隣のラジオ体操に参加せり顔馴染みなく片隅に立つ
十段のもろぶた並ぶゴミ置場賑やかなりし光景を想う
松田忠一☆　山形

忘るまじ3・11大震災花ガーベラと歌「花は咲く」
芽吹きゆく疎林を潤す流れ澄みて辺に水芭蕉清か群れ咲く
薫る若葉はや田植えどき散居村偲べば聞こゆ早乙女の声

七月号　十首選

作品三　天野克彦

ワーズワース詩集を買ったあの夜は旅
先だった金沢の街　新井光雄☆
きしむ音ひびかせ電車遠くなり人無き
駅にわれは下りたり　佐々木政子
歌会の仲間と話せば楽しくて孤独とな
らず我が会話まで　山﨑猛☆
足元を雀と鳩が横切りぬ驚く我に飛び
立ちもせず　髙藤朱美☆
キッチンに筍ゆがく香り満つ今宵はシ
ンプル土佐煮を味わう　塚本節子☆
川越の短歌の学び深くして先輩方のや
さしき声に　立石節子☆
春の宵夢中で読みぬ「ひねくれ一茶」田
辺聖子の健筆光る　後藤恭介☆
どの顔も当時の面影残しつつしっかり
老けた喜寿の同窓会　長谷川剛
父と母の墓前に参る菩提寺に青葉木漏
れ日薫るそよ風　松田忠一☆
わが姓のルーツをたどる二人旅東北巡
りて八戸へ着く　河原木光子☆

変わる世に残したきもの消えてゆく文化も人も「まち」の暮しも
いまもなお桜色した想い出よふるさとの学び舎廃校近し
山際の芒野原は田畑跡野風は先人の嘆息の声
生き甲斐を感じて暮し活きたいと君を支えつ支えられつつ
児珠純子　山形

姫小百合もいちど見たいと横須賀の叔父よりメール届く初夏
われの名の「純」を提案したる叔父「名付け親だ」と幾度も言ふ
名付け親なれど親と呼べる人吾にあり父母すでに遠くなりても
百名山数多の山に登りたる叔父の愛せる高山植物
同郷で見合ひ結婚の叔父と叔母夫婦登山を楽しみたりき
叔母逝きて一年となり叔父も老い山形までは来ることかなはず
六月十五日朝日連峰山開き若き人等に叔父の重なる
朝日岳にわれも登れる夢見れど六十半ばの膝頼りなし
手賀稔子☆　メルボルン

風に飛ぶ蜘蛛の巣作り八角形織りなしてゆく定規もなしに
蟹穴ができて玄米炊き上がる見せてとせがむつぶらな瞳
中庭で広げた本に舞い落ちる花びらの色母の口紅
いつの日か光となりて消え行かん母星に帰る探査機のように
魔女まねてすり胡麻きな粉クコの実を調合します夫の朝食
にぎやかにイチジク啄む鳥たちよ残しておいてジャム作るから

（☆印は新仮名遣い希望者です）

歌集／歌書御礼

編集室・佐藤靖子

■市場和子歌集『和心』

令和七年四月十八日発行の第一歌集で三八五首を収めている。著者は茶道書道に通じ、その交友の勧めにより平成十八年「星雲」に入会した。題名の『和心』は仏教用語の（わしん）と、日本の伝統文化や精神という（わごころ）と両方を跨いでいると感じた。人を愛する詠いぶりが充分伝わる一冊である。

茶道を通じて活動している歌がある。

四年ぶりの出雲大社の献茶式祝詞
と共に雨音しきり

夏衣まといて今日も学校へ茶道教
えに心してゆかん

笹の葉に短冊つるして願いごと笑
顔の繋がる七夕茶会

支援を続ける歌。

外国の貧しき児らを支援したる三十五年の過ぎこし思う
いつの日か茶道体験をこの児らへ実現したき夢をいだけり
万作の花咲く頃に始めし支援今年もかわらず庭に咲き満つ

医師だった夫との外国旅行も多く思い出の歌もあるが、何より一男一女も医師として被災地の応援に行くなど、社会貢献する一家だ。

長女美帆医療班にて輪島へと心配しつつもエールを送る
びわの実の色づく頃に長女生(あ)れわれの主治医と今はなりたり
夫の逝去のときの歌。
三と九の仕草のこして夫逝きぬ粉雪の舞うバレンタインの夜
集中の綺麗な言葉、副虹、菊炭、伯州綿。

（青磁社刊）

■桑山則子歌集『なごり』

令和七年五月九日発行の第六歌集で三七七首を収めている。見出しが、そのまへ・そのとき・そののち・そのころ・そのたびというもので、早く読みたい気持になった。読んでいると私の中に、桜・祭・夫という三本の柱が立ってきた。どれも底流するものは命である。忘れがたい思い出の堆積を、あるとき篩にかけて自分を放ち、前に進む、そうやって時を動かす。『滄』会員。

この歌集の入口は季のうつろいを見せる樹木の様子が詠われている。中の一首は色と光がつくり出すこの上ない赤を思わせてくれる。

満天星(どうだん)の小さき一樹が炎(ほむら)だつ雲の絶え間のつかのまの陽に
花火や祭り、また五山送り火等。
平和祈念・慰霊の尺玉白菊(しらぎく)が例年のごと三発あがる
コロナ禍の終息を願ひ金冠(キンカムロ)一発続きて花火の終る
花火師の誇りと祈り　絆にて無観客の空に花火があがる
船形は帆先の位置に一基の火　先ゆき不安の世上を照らす
癌、看取りは家で。
変りゆく生活もろもろこれからが介護の本番気負はずまゐらう
むきあひてよりそひゆかむかぎりあるかけがへのなきいまこの時を桜。
花季(はなびき)に逝きたるは夫(つま)のはかりごとさくらふるたび思ひ出すゆゑ
執淡くすぎこしものを桜ゆゑ執深き性(さぶ)と変(な)りて久しき
魅入られて桜に狂ふもその旅で二千年桜に出逢ひたる故(ゆゑ)―山高の神代桜

（公益財団法人　角川文化振興財団刊）

◇7月の川越歌会レポート

7月は26日の第四土曜日午後1時より5時まで行われました。出席者はいつもの野崎礼子、高橋燿子、倉浪ゆみ、立石節子の諸氏と大山。初参加の須藤紀子氏の6名です。

「冬雷」7月号掲載の作品を批評し合いました。

◆9月は27日の午後1時より5時まで。ウエスタ「川越」二階会議室3号です。会場は18人室なので、興味ある方のご出席も歓迎します。左へご一報下さい。

☎　高橋燿子（049-231-8515）
☎　安川敏子（090-4608-7265）
☎　野崎礼子（090-9971-8149）

編集後記

▽毎月の最終校正では担当四名が事務局に集まり力を尽くしているが、それでも完全というわけにはいかない。あとで掲載誌を見て新仮名表記の歌であるのに旧仮名になっていた箇所に気付くことがある。そして、しばしば批評欄でそういう作品が取り上げられることがあるが、評者が気がついて新仮名表記に直して下さっている。その配慮の温かさと広い心に感謝せずにはいられない。

▽現代の書籍はＤＴＰ組版で行うが、これより前は活字を組んで版を作る活版時代だった。大山氏の今月の大友柳太朗論では歌集『渚』の出来上がりに見られる左右の頁の僅かな版のずれを述べている箇所があった。長く印刷業界におられた氏の確かな目を感じる文章である。

（桜井美保子）

▽今年もはや七月下旬。すぐお盆が来る。そのためもあるのか今月は友や肉親との別れの歌に心ひかれた。羽田さんの歌に亡骸の布団の上に眠る猫とあるが、筆者もそういう話を聞いた。訪問診療していた患者さんの最期を看取った際飼い猫たちがベッドの上に何事もなかったかのように眠っており、何とも言えない安らぎが空間に満ちていたとか。猫は魔物、猫は死者を起すとか言われていたが全くの迷信とわかる。猫好きで有名な大佛次郎の葬儀は猫が出入りしていたのだろうか。（橘　美千代）

▽本年四月号時点での出詠者数が一一〇名ほどとなっています。現状は変わらず推移していると思います。この会員数の規模で、小誌はしっかりと運営され、本号も本文60頁をキープしています。

▽しかし、百名出詠の壁というものもあり、そういう事態にも備えておかねばなりません。無理をお願いしない範囲での運営体制の強化は計ります。二年ほど先を考えての諸規定の改訂を計画中です。先ず年会費を現状に即したシンプルなものに変更します。発行所、編集者、選者等を含めての強化、若返りを進めたいと思います。

▽本号より「冬雷集評」を桜井美保子氏、「作品三評」を山本三男氏に交代します。評者が代われば良い意味での気分一新にもなります。

（大山敏夫）

▽遠い日を懐かしみながら毎月楽しみに読ませて戴いている「大友柳太朗と美空ひばり」は4回目を迎えた。今回は若き日の句を石田波郷自身が解説している文章がある。最後の言葉が印象的で、砂浜の大きな風景に感動して力んで作った、とあるが、ひるがほの句はどこか静かで奥深い感じがする。また、坪内稔典氏がブログに載せた波郷の十代の作品と鑑賞が紹介されていて、その中にもひるがほの句が含まれている。この句の「よべの渚」というフレーズが心にのこる。

▽七月四日に八月号の校正をした。例年ならば毎日雨が降る時期なのに前の週から真夏日が続いていて大変な日照りの中を大塚・桜井・森藤さんが来て下さった。猛暑の中ほんとうに有難うございます。

▽こうして編集後記を書いている間も外はギラギラとした陽射しで目を開けていられない程眩しい。人間だけでなくニュースでは乳牛も鶏も苦しみながら堪えているという。山に食べる物のない熊は人家に入って来るようになり、命を守る為に必死だ。皆様どうぞお体に気をつけてこの季節を無事に乗り越えて下さい。

▽誤植訂正

七月号29頁　大塚照美氏六首目

堀 → 塀　でした。

▽寄附御礼

児玉孝子　奥山清子

▽新入会員紹介

手賀稔子氏（ホームページより）

（小林芳枝）

《冬雷規定・掲載用》

一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）

一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九　小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）

一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。

一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。

一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。

一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。

一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七大山方」とする。

一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。

一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。

＊会費は原則として振替にて納入する事。

A	作品三欄所属会員	一四〇〇〇円
B	作品二欄所属会員	一七〇〇〇円
C	作品一欄所属会員	二〇〇〇〇円
D	維持会員（二部購入）	二六〇〇〇円
E	購読会員	八〇〇〇円

一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はＢ５判二百字詰め タテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。

冬雷集・作品三欄（メール投稿分）

・担当　大山　敏夫

作品一欄　・担当　桜井美保子

作品二欄・作品三欄（手書き投稿分）

・担当　小林　芳枝

一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。

一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。

《Eメールでの投稿案内》

白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。

一、Eメールによる投稿は左記で対応する。

大山 敏夫　tourai-ooyama@nifty.com

小林 芳枝　k.yosie@nifty.com

桜井美保子　mihoko4966@s4.dion.ne.jp

《選者住所》大山　敏夫　350-1142 川越市藤間 540-2-207　☎ 090-2565-2263

小林　芳枝　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409　☎ 03-3604-3655

桜井美保子　235-0022 横浜市磯子区汐見台 2-2-2-608　☎ 090-6029-0590

2025 年 9 月 1 日発行

編集発行人　大 山　敏 夫

データ制作　冬 雷 編 集 室

印刷・製本　㈱ ローヤル企画

発 行 所　冬 雷 短 歌 会

350-1142 川越市藤間 540-2-207

電話　090-2565-2263

事 務 局　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409

振替　00140-8-92027

ホームページ　http://www.tourai.jp

頒　価　700 円